



写真1 シテ島パノラマ

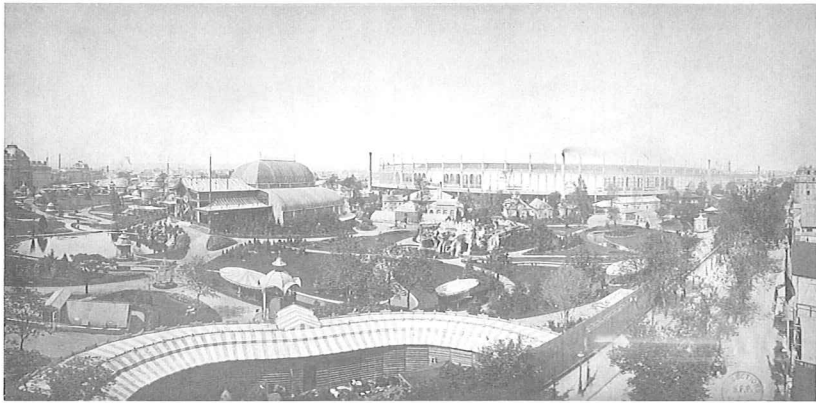


写真2 ブラウン 会場パノラマ (トラヴィユ門より記念温室、産業宮)

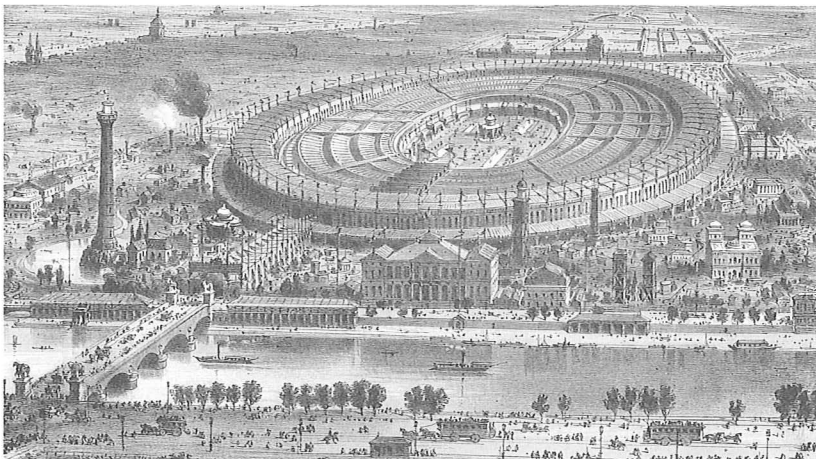


図1 プロヴォス 1867年万国博覧会

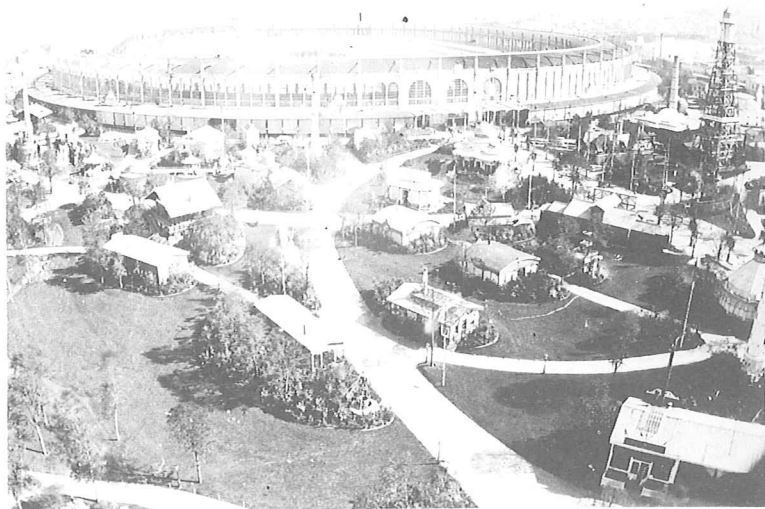


写真3 会場俯瞰写真 (大学門から産業宮正面)



写真4 産業宮内部

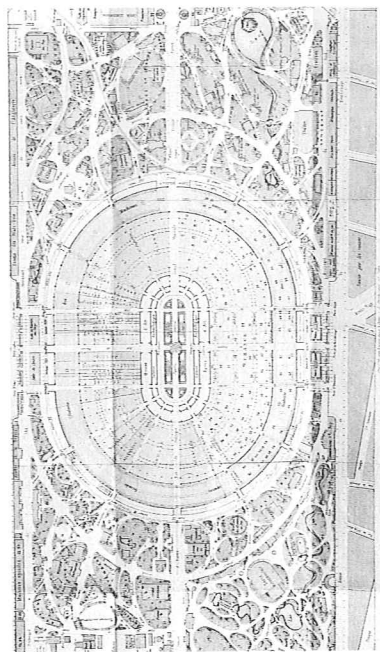


図3 会場全体図

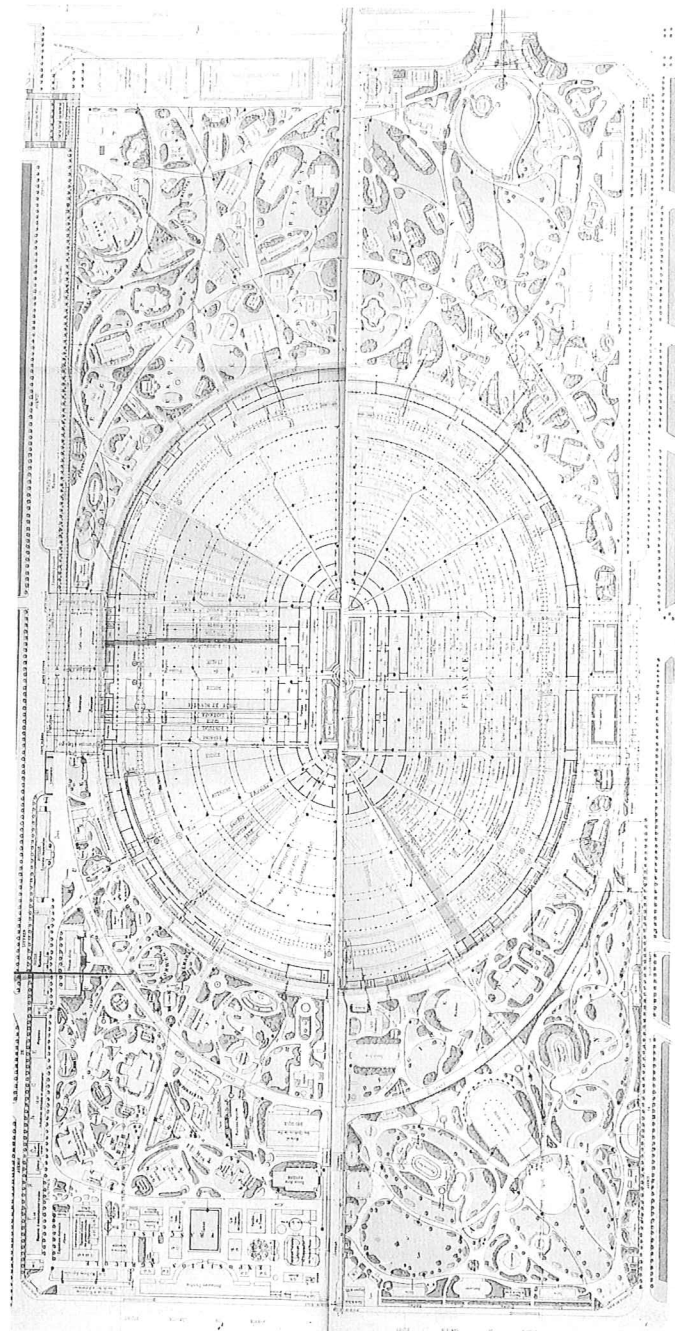


図2 会場全体図



写真7 ビッソン 機械ギャラリー (イタリア、日本)

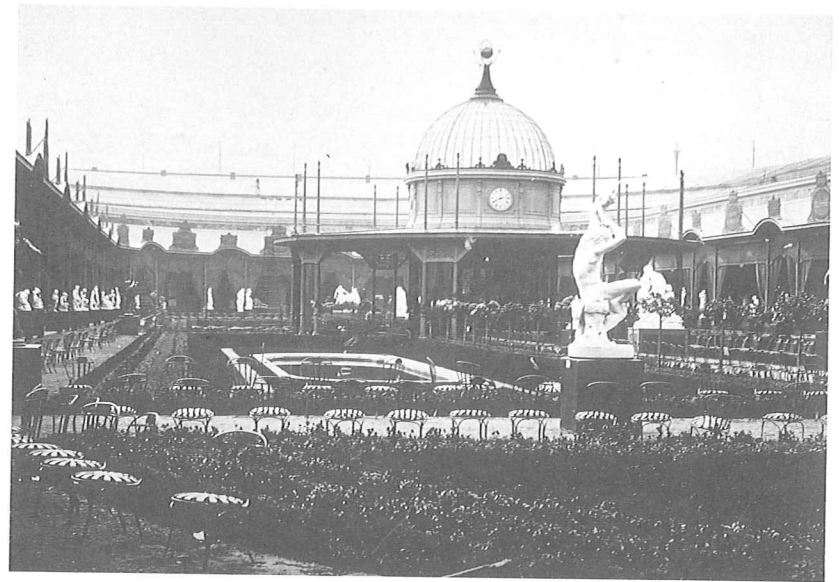


写真5 ビッソン 産業宮中央庭園



写真8 産業宮展示 (イタリア工芸品)



写真6 家具ギャラリー (フランス)

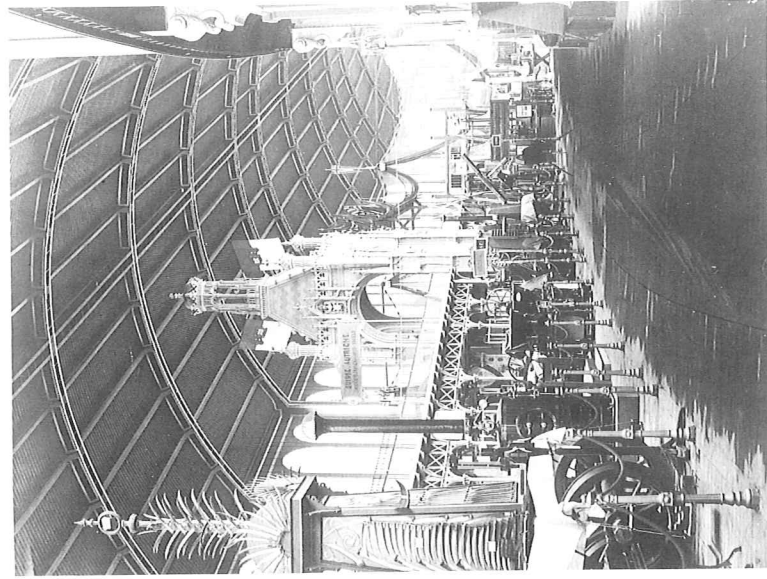


写真12 ビンソン 機械ギャラリー (スイス)

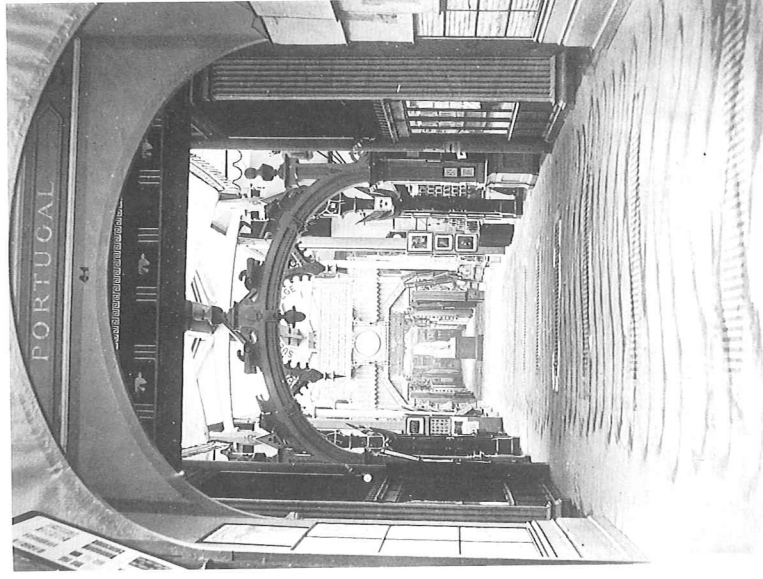


写真10 産業宮展示 (ポルトガル)

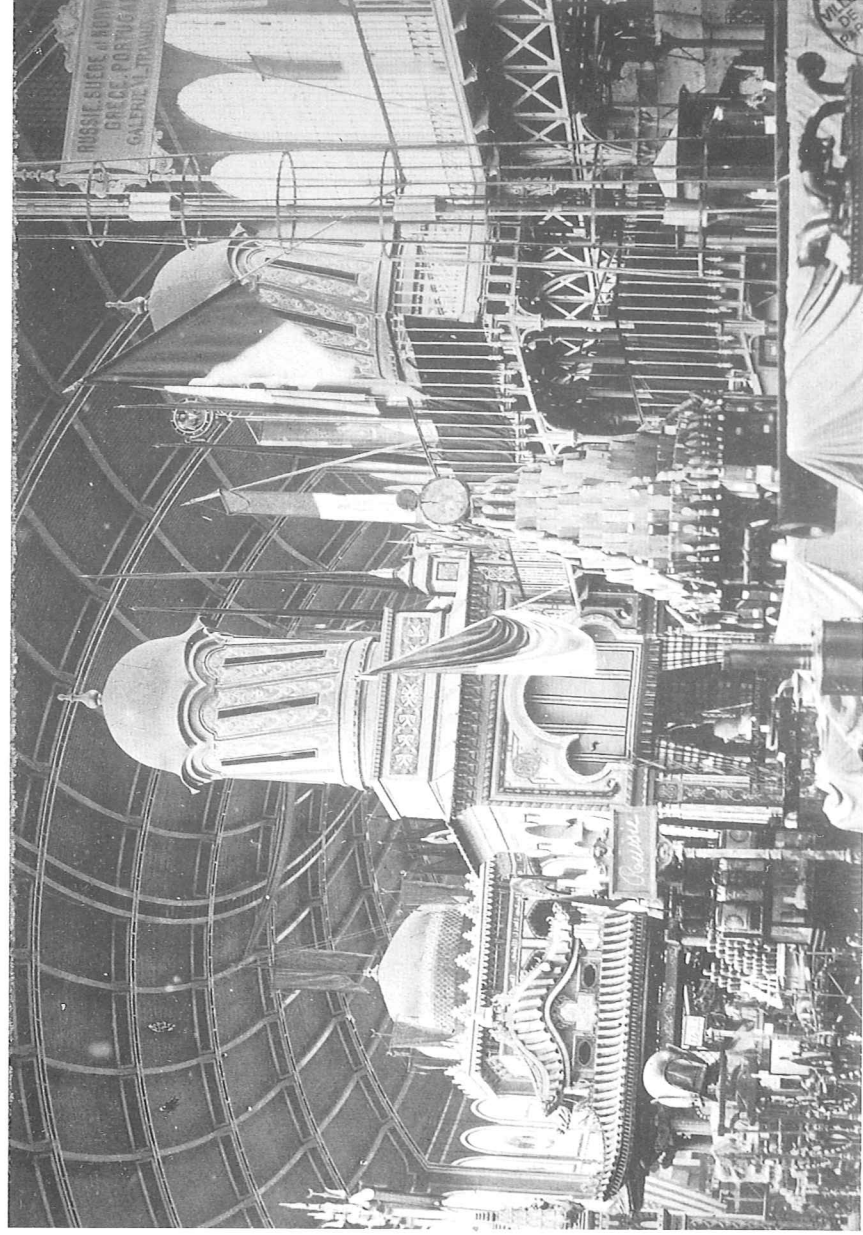


写真9 機械ギャラリー (ロシア、イタリア、日本)



写真13 ビッソン 機械ギャラリー (プロシャ)

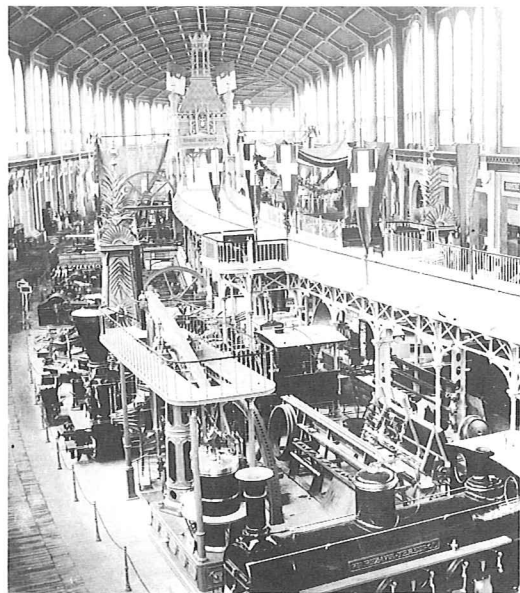


写真15 機械ギャラリー (スイス)

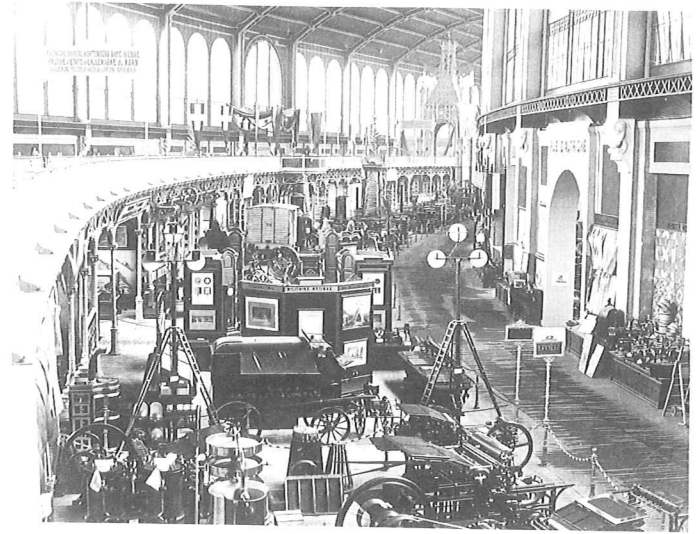


写真11 ビッソン 機械ギャラリー (オーストリア)

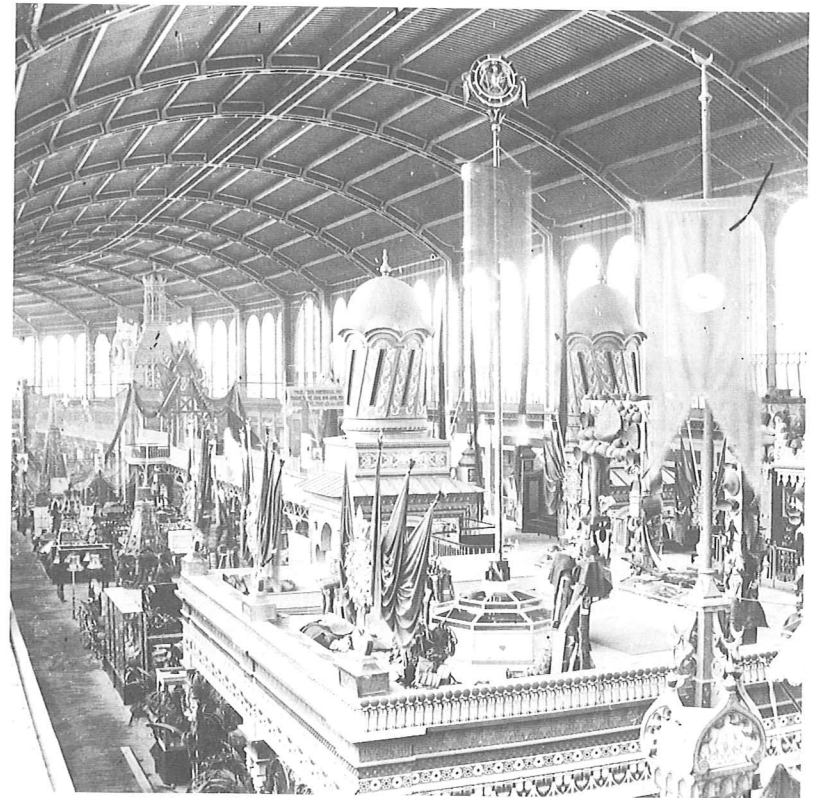


写真13 機械ギャラリー (エジプト)

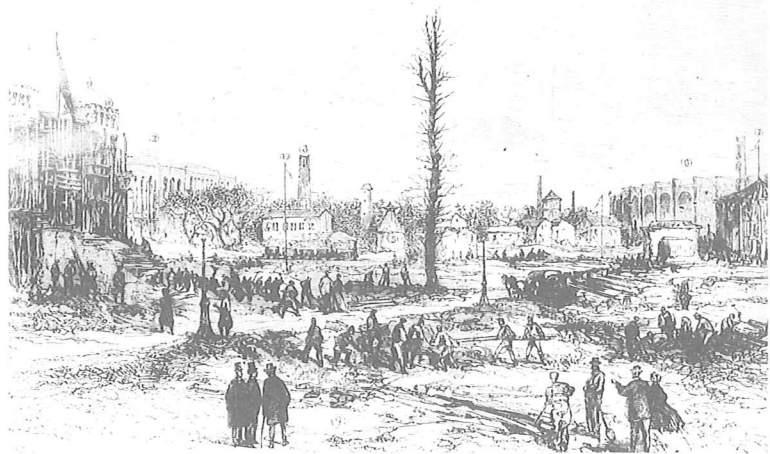


図5 1867年2月の工事状況

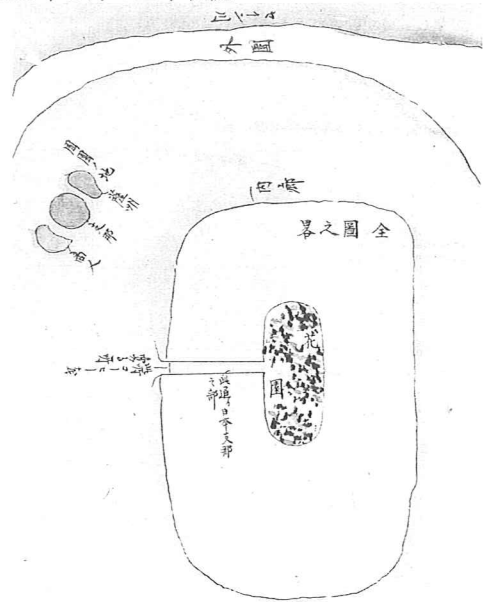


図4 向山文書付属会場配置図



写真17 エジプト・パヴィリオン



写真17 デュヴァルフェ 皇帝パヴィリオン



写真20 イタリア美術展示室



写真21 イタリア美術展示室



写真18 兵器の野外展示



写真19 ピッソン チュニジア・パヴィリオン

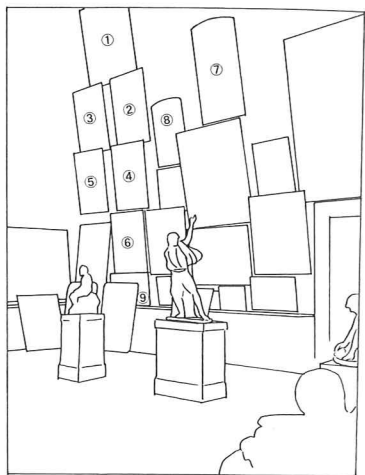


図6 日本出品油画



15 写真22 (部分拡大)



写真22 イタリア美術展示室

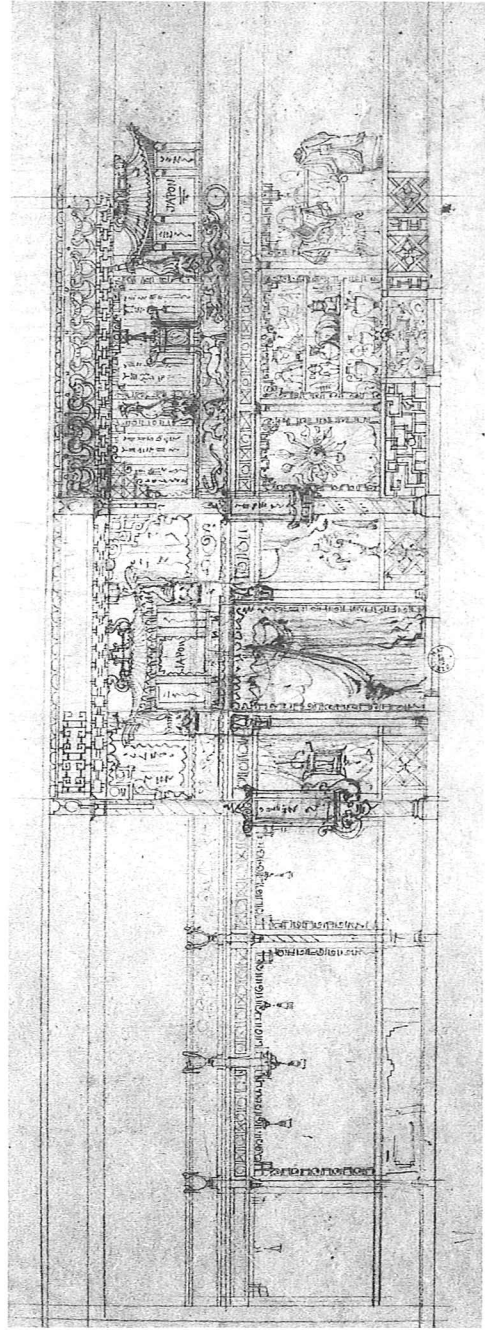


図7 シャボン 日本アーケード (下書き)

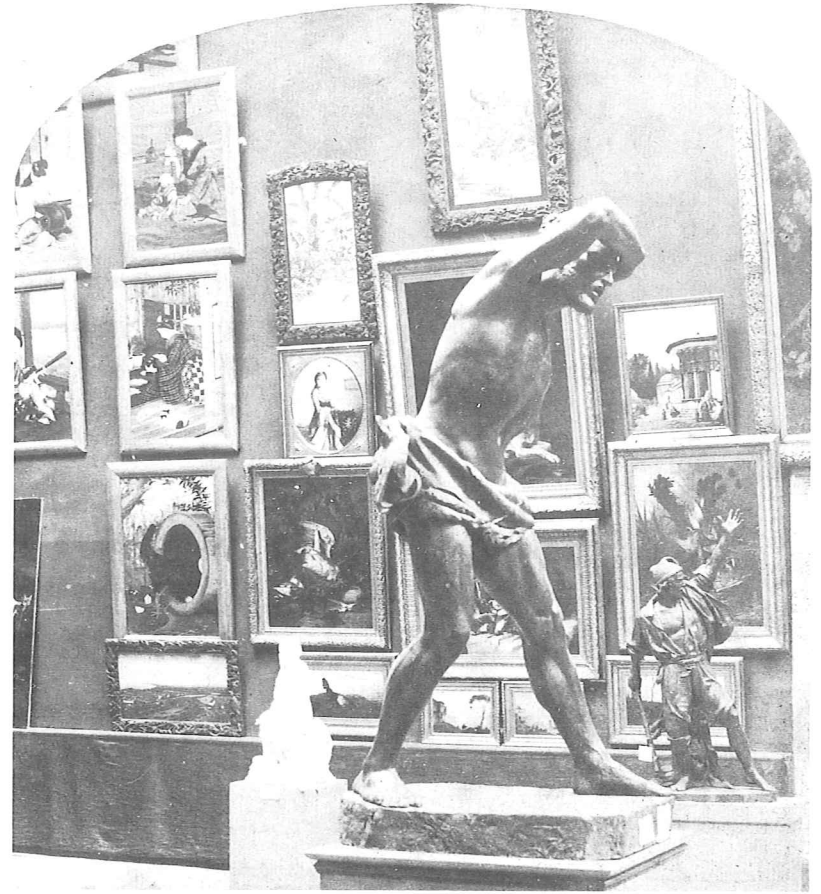


写真23 イタリア美術展示室

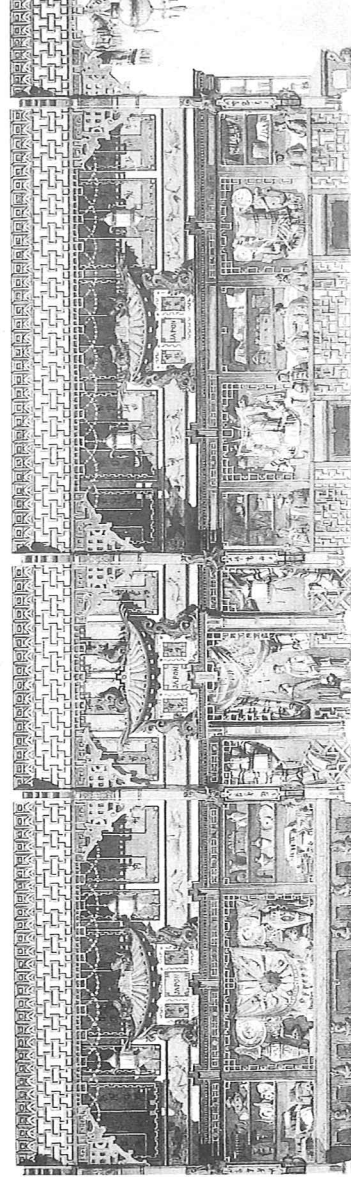


図10 シャボン 日本アーケード2

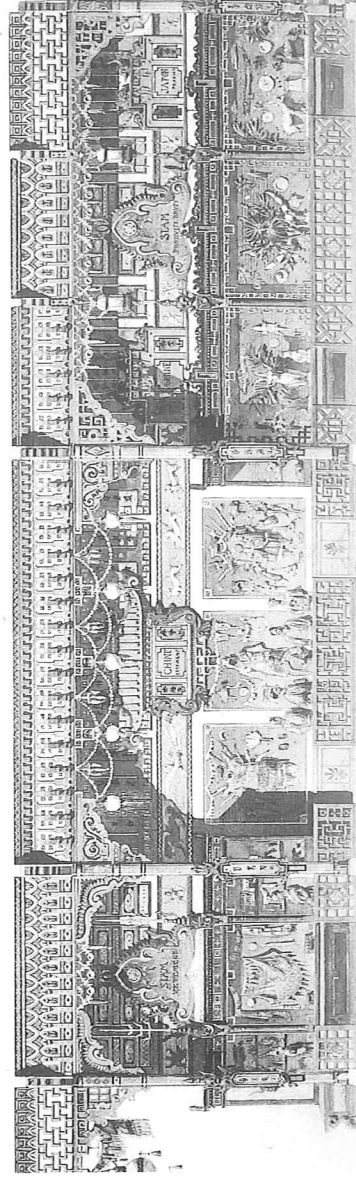


図11 シャボン 日本アーケード3

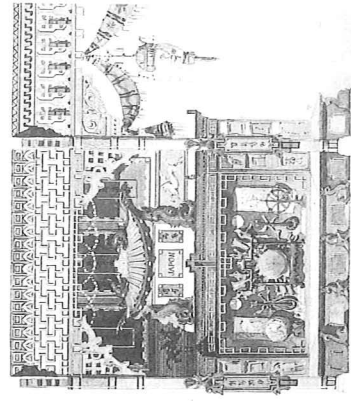


図8 シャボン 日本アーケード1

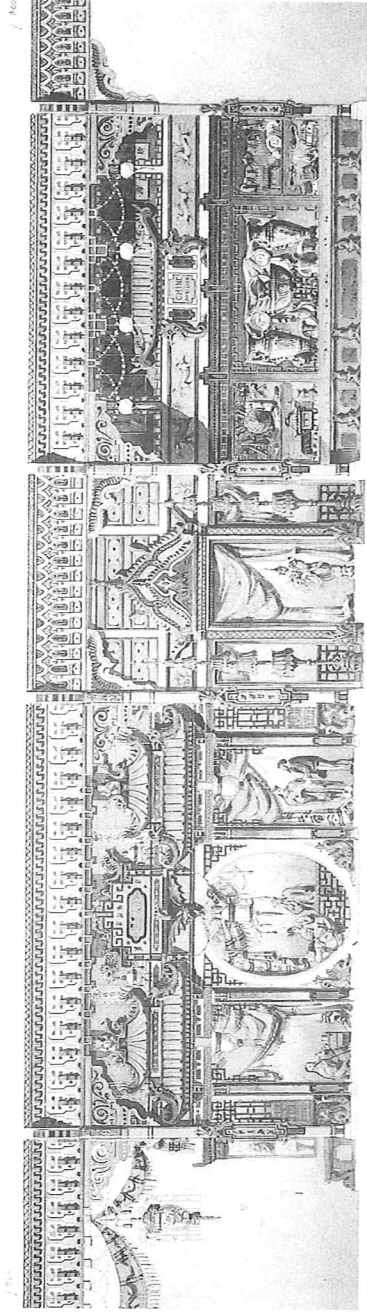


図9 シャボン 日本アーケード1 (続き)

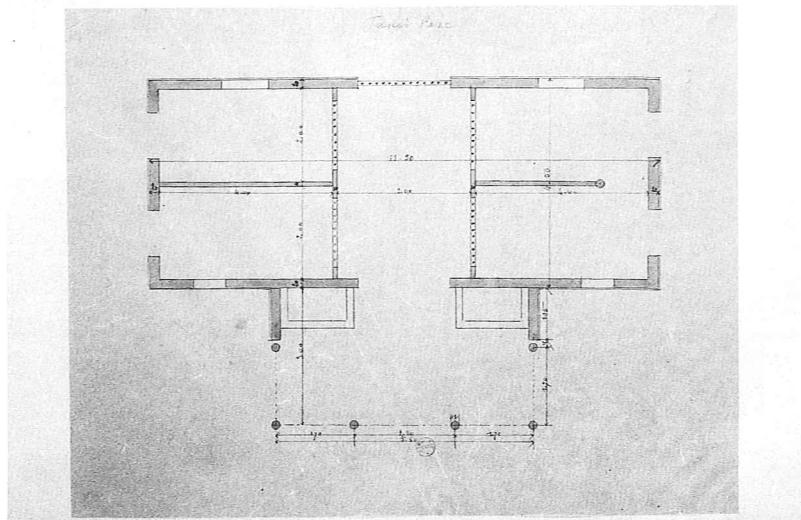
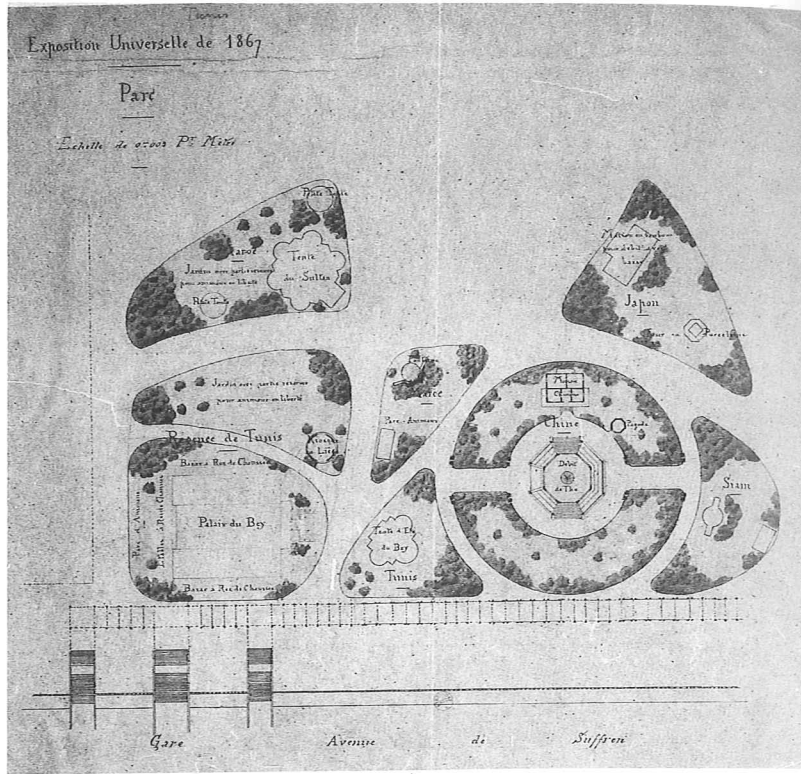


図15 日本、中国ほかパヴィリオン配置図

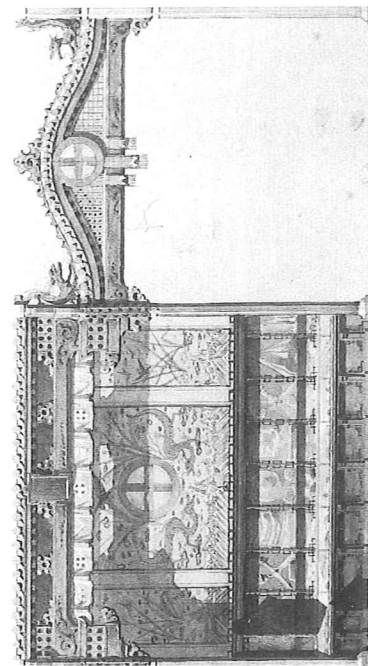


図14 シャボン 琉球アーケード

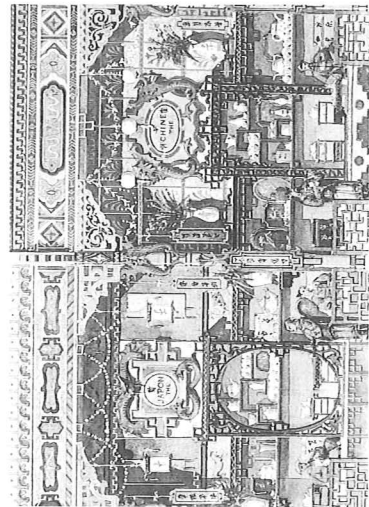


図12 シャボン 日本アーケード5

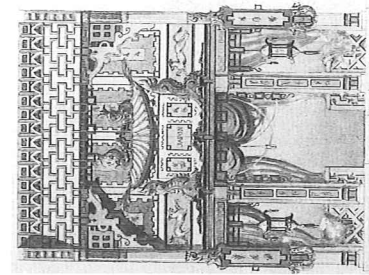
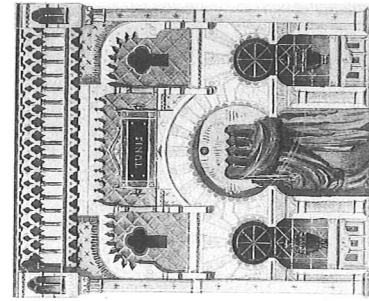


図13 シャボン 日本とチュニジアのアーケード



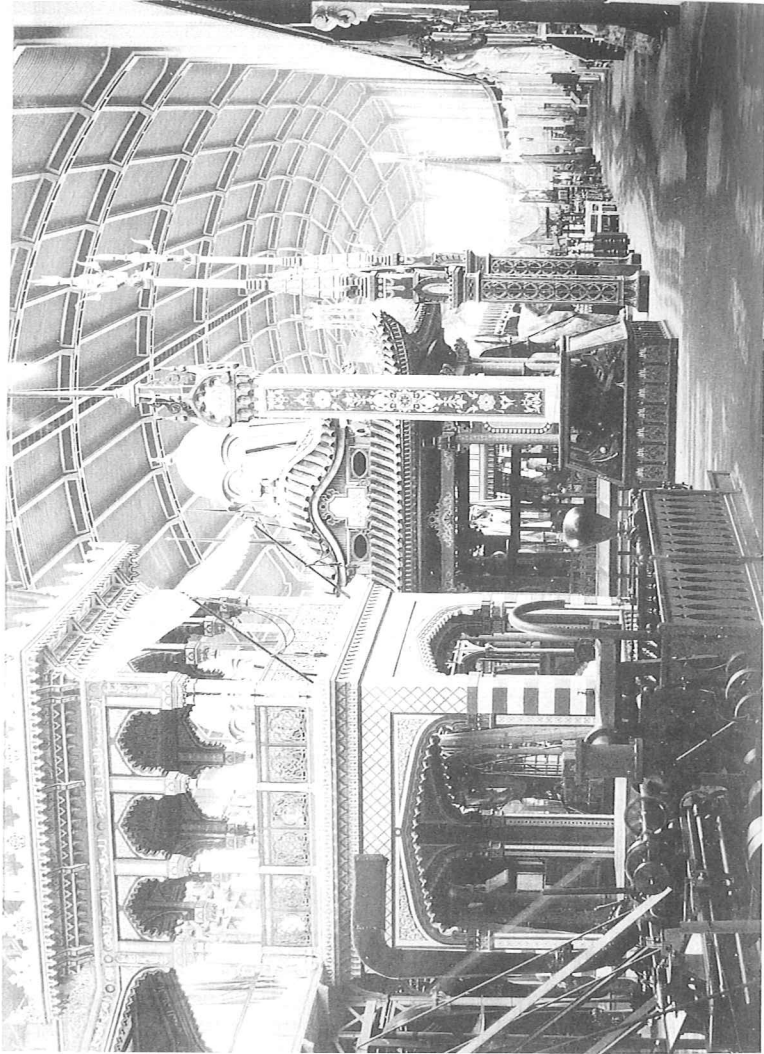


写真24 機械ギャラリー (モロッコ、日本)



図17 ランセロ シャムと日本の装飾

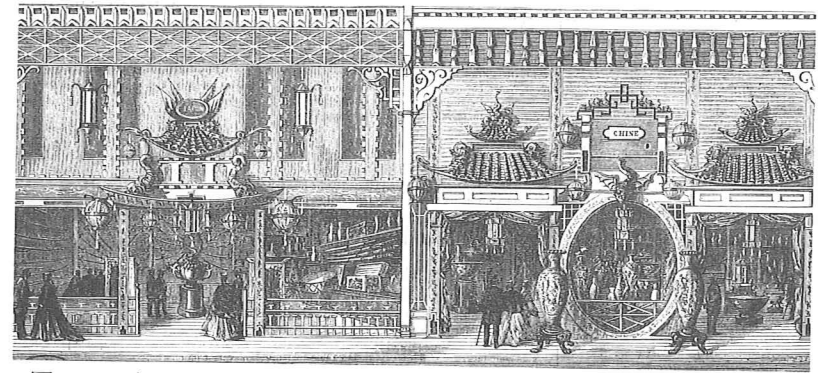


図16 日本の展示、中華帝国の展示

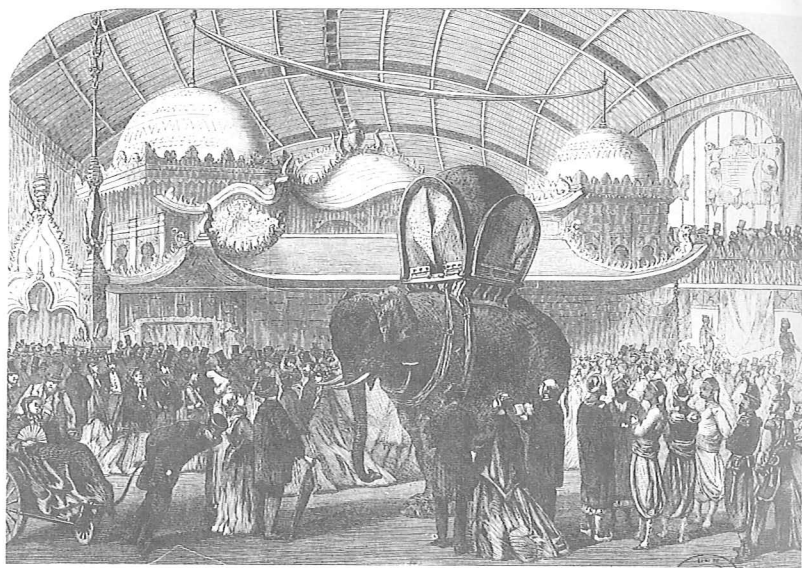


図18 機械ギャラリーのシャムの部の象模型



図25 モンタニ 薩摩公の家の内部

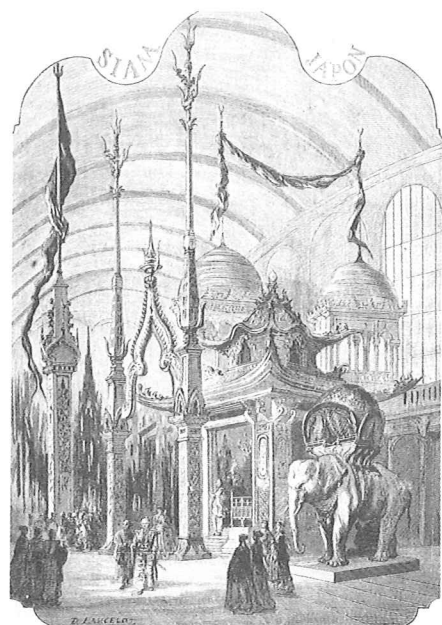


図19 ランセロ 日本の四阿

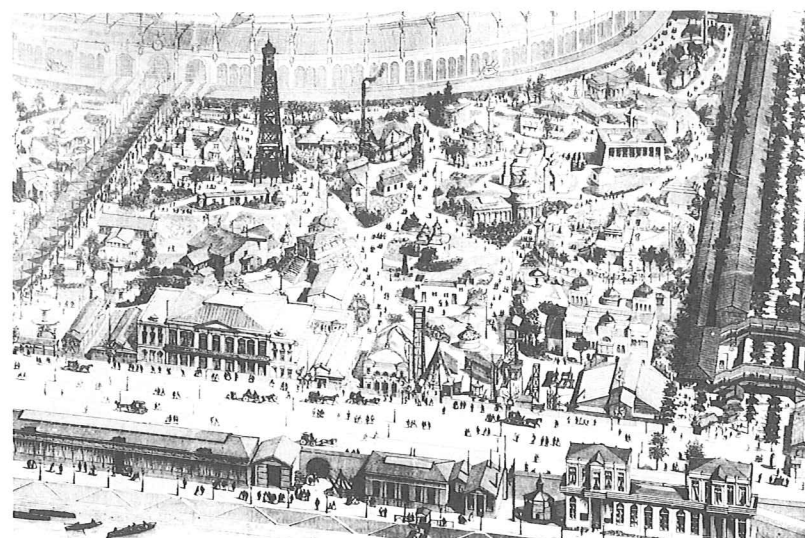


図26 シセリ イギリス区画

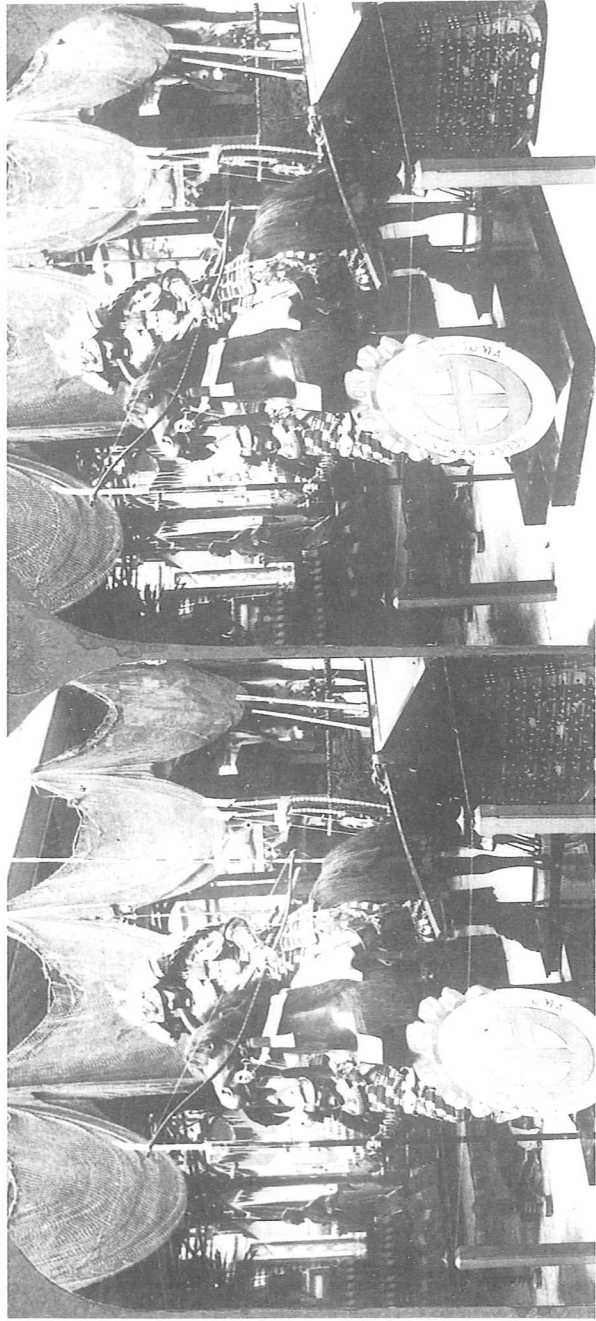


写真27 武者人形飾馬

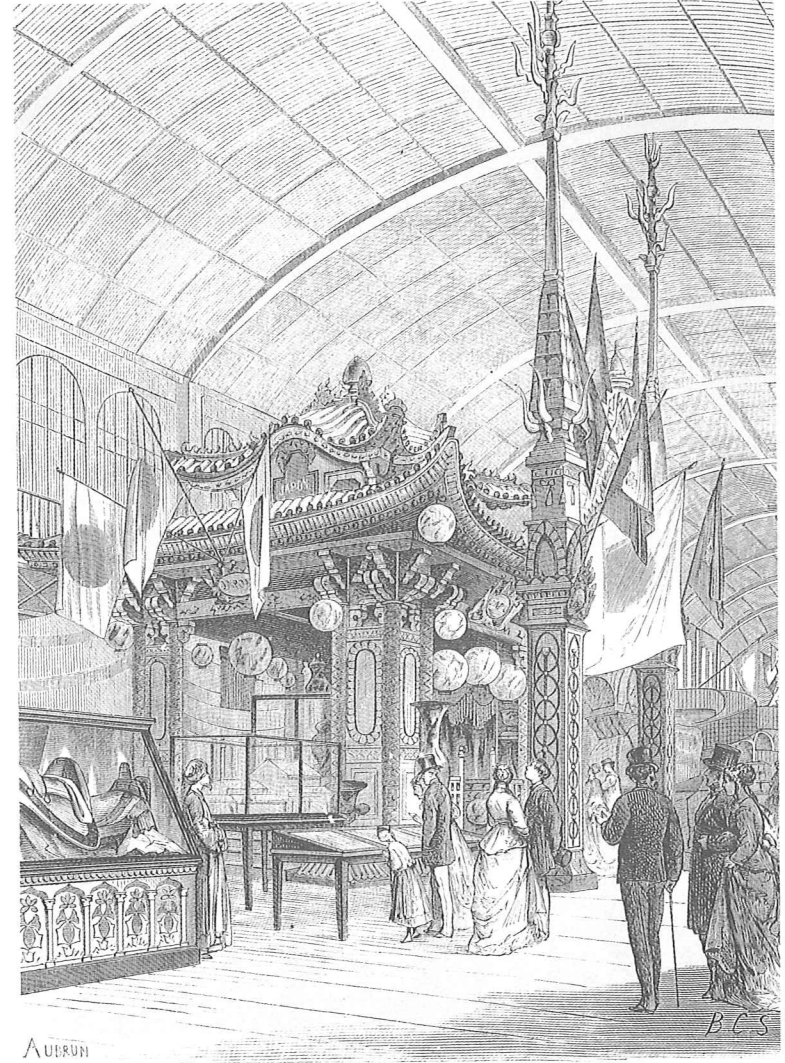


図20 オープルン 機械ギャラリー 日本

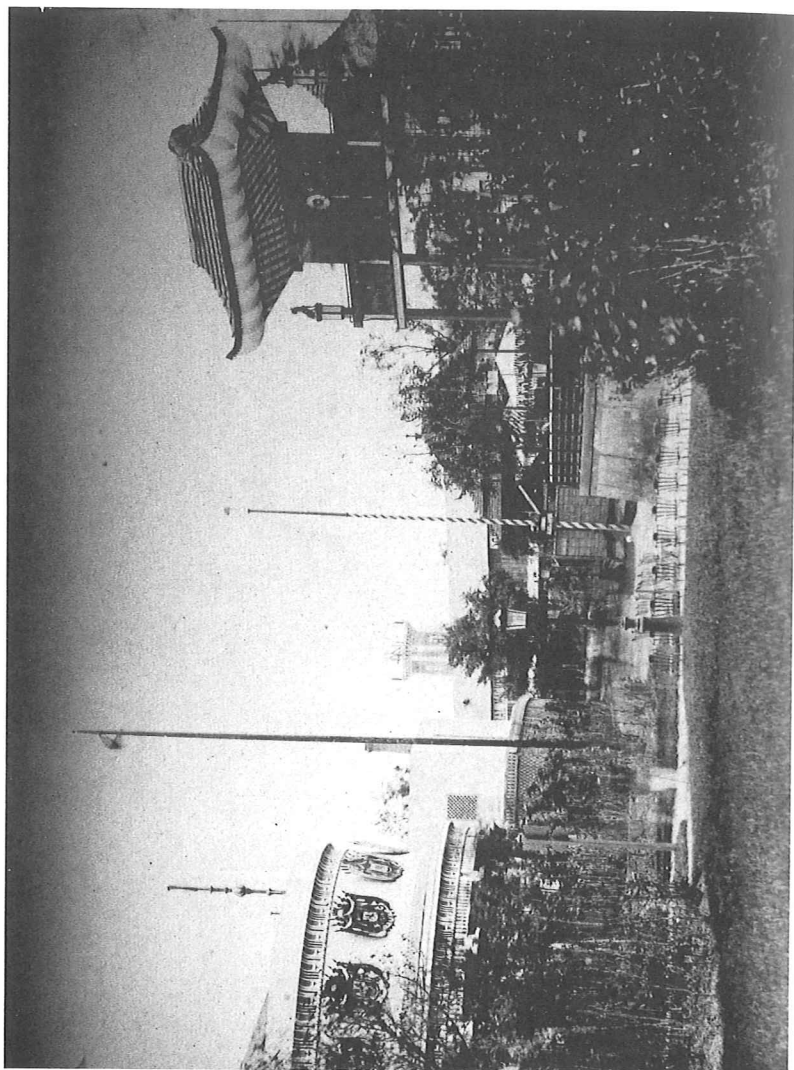


写真28 スエズ・中国・バグィリオン

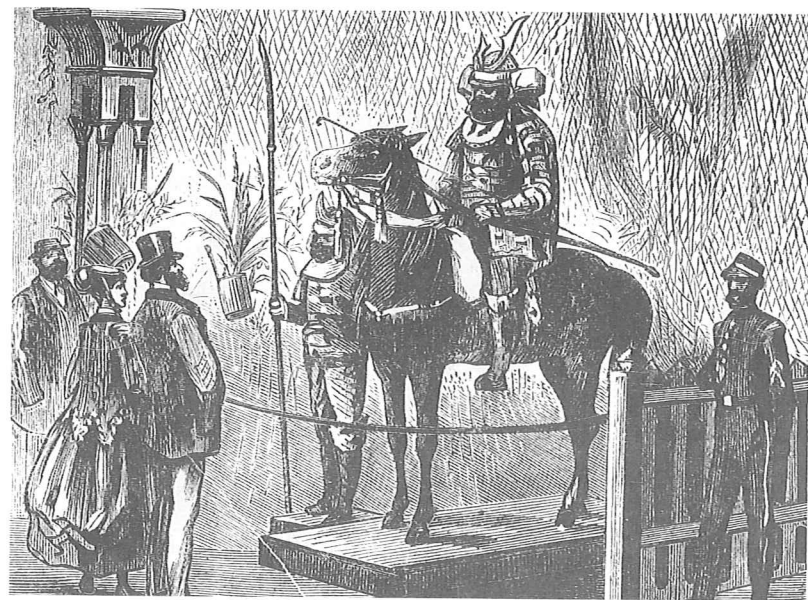


図21 日本の典型



図22 ウェーバー 日本の戦士

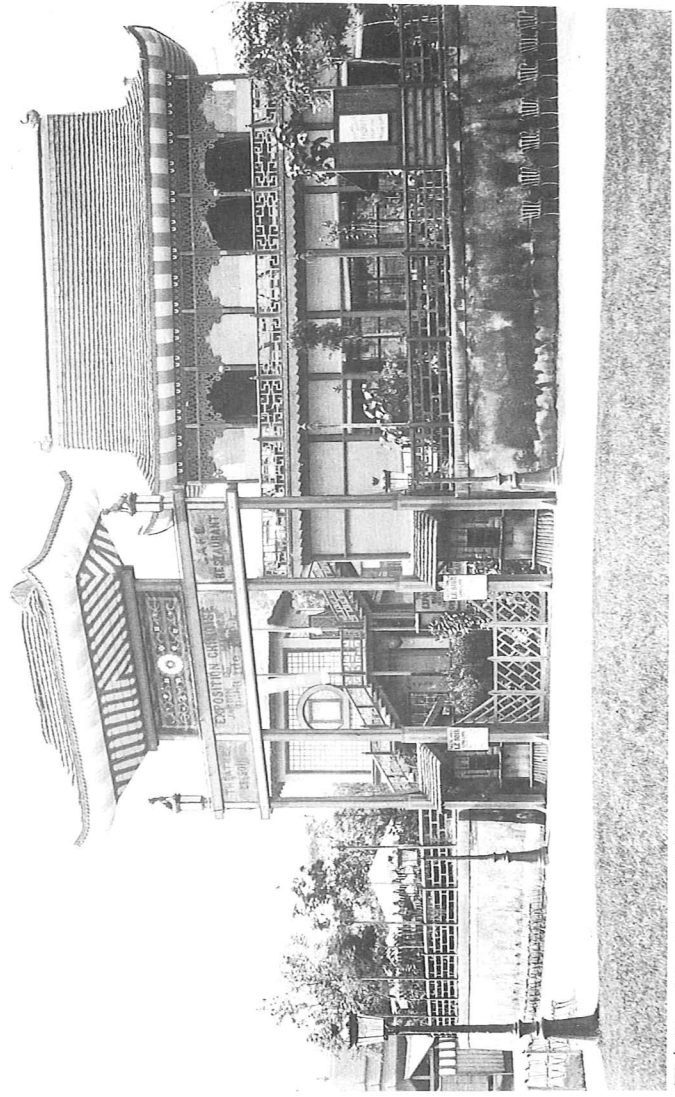


写真31 ビッソン 中国パヴィリオン正面

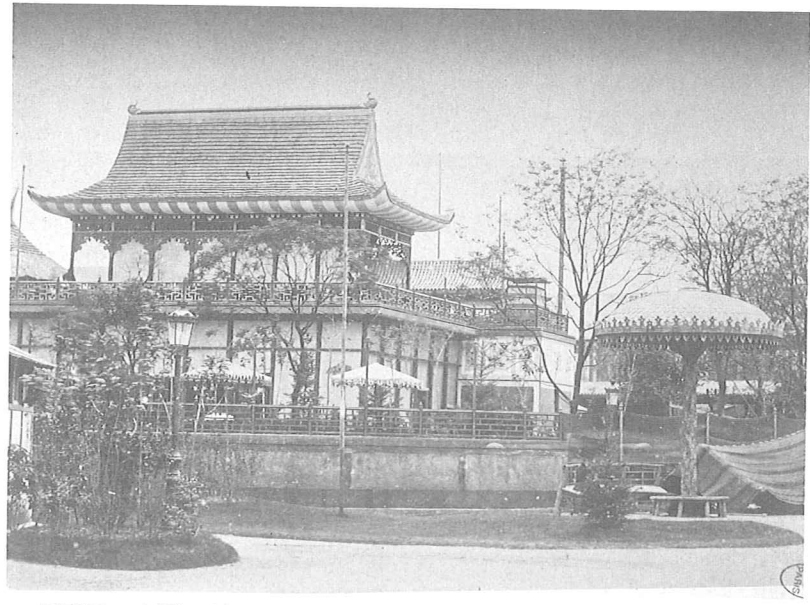


写真29 中国パヴィリオン



写真30 中国パヴィリオン正面

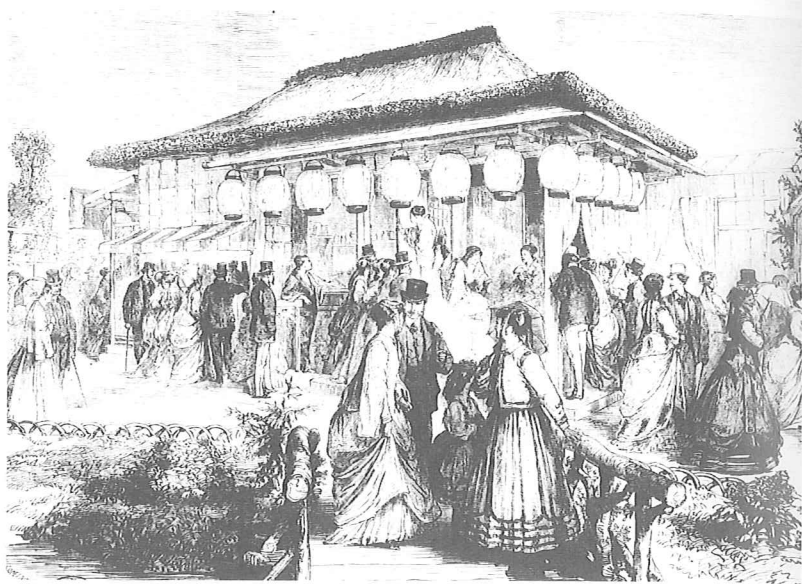


図23 日本展示の全景

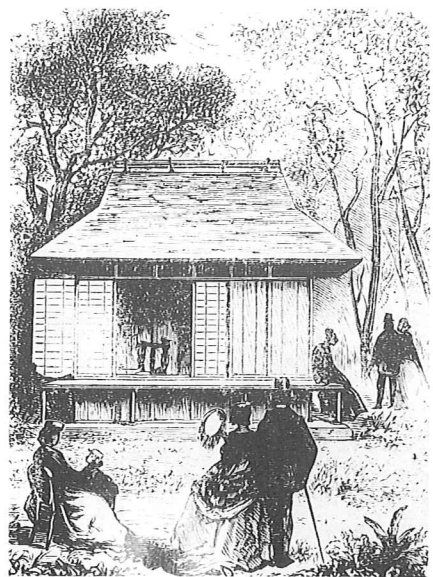


図24 日本の四阿

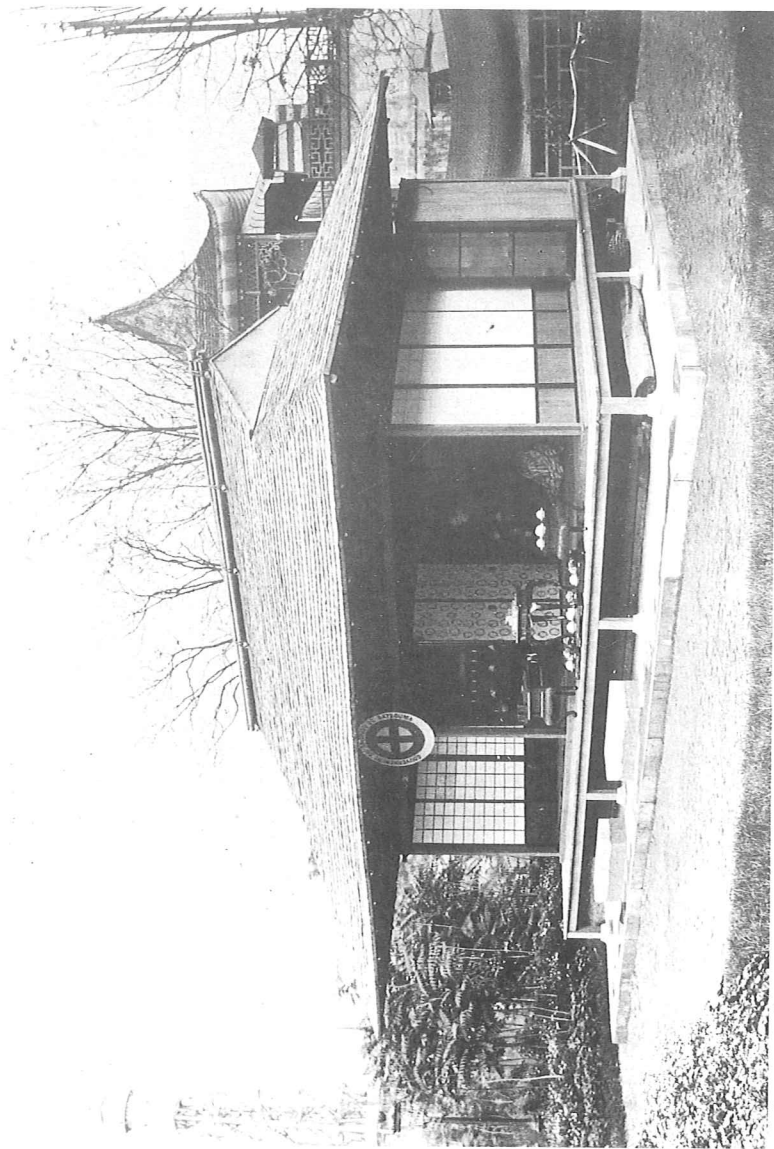


写真32 琉球パビリオン



図27 グランプリ金メダル

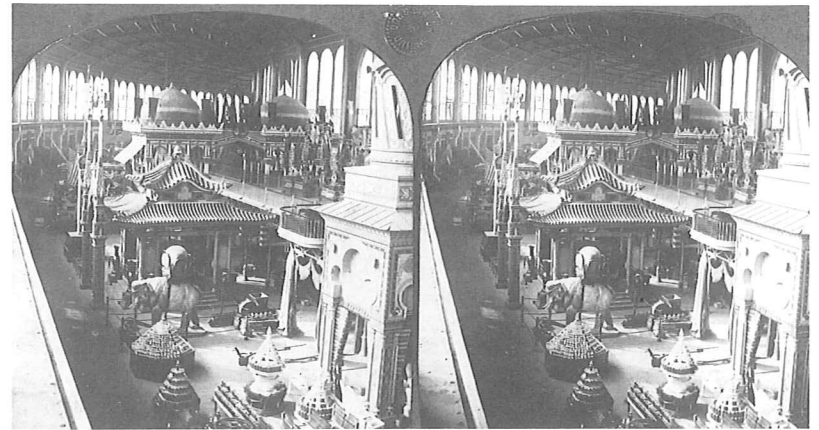


写真25 機械ギャラリー（日本）

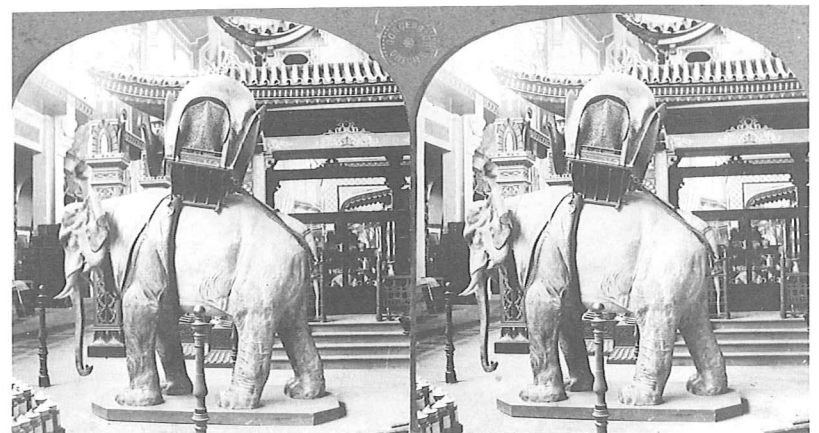


写真26 機械ギャラリー（象模型、日本）

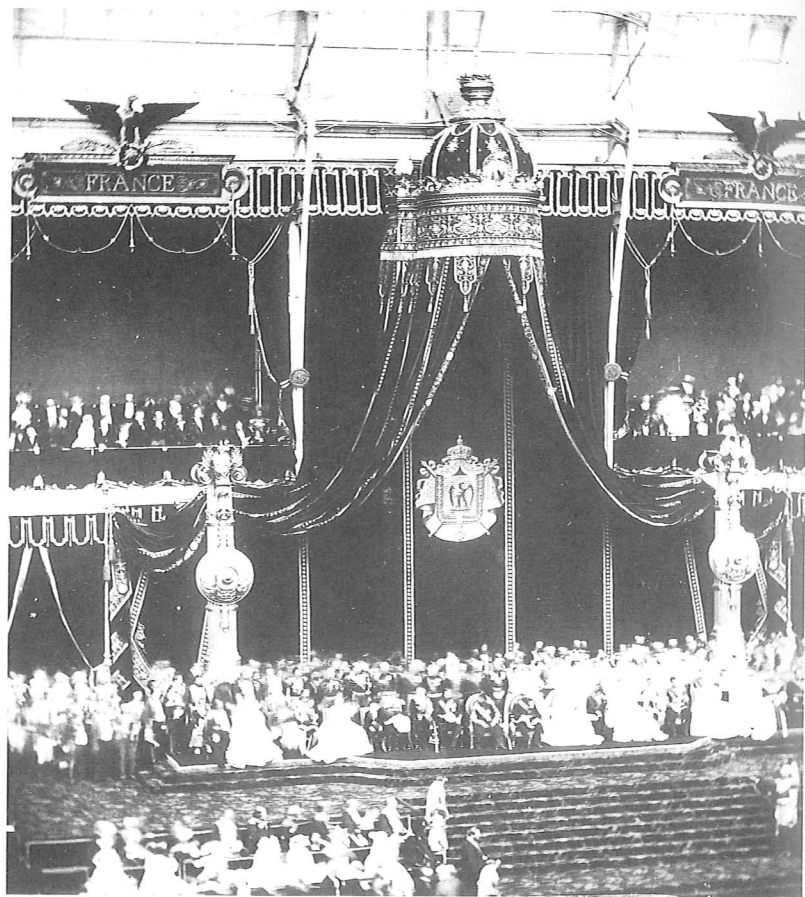


写真34 褒償授与式演壇

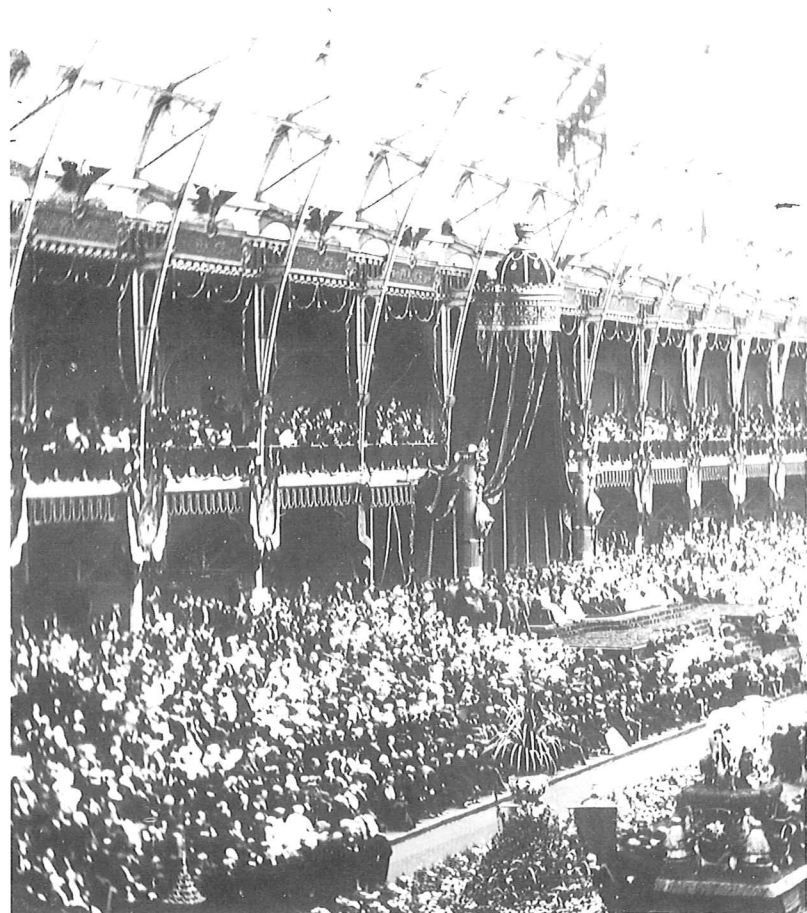


写真33 褒償授与式



作品6 色絵瓢箪文花瓶、色絵藤文花瓶



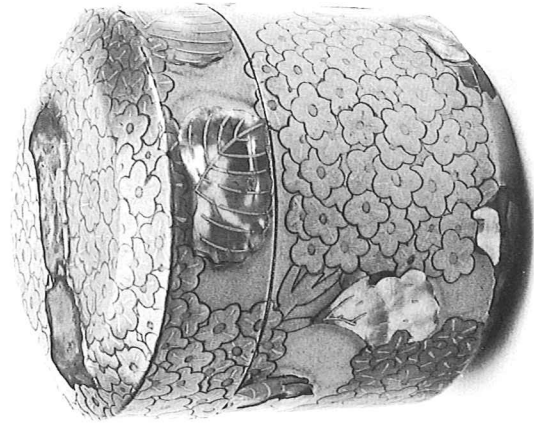
作品8 色絵花鳥文花瓶



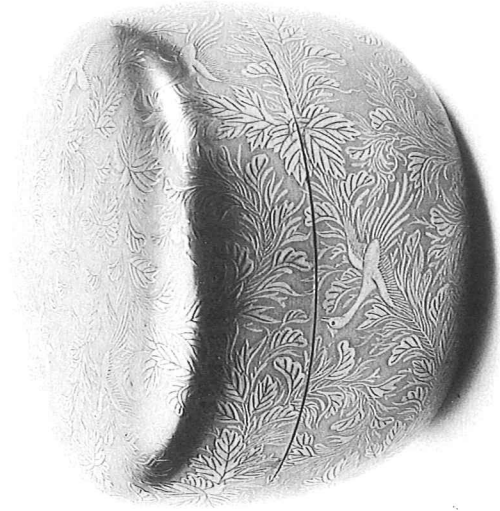
作品5 豊国 向嶋乃夜桜



作品7 蝶山 色絵花鳥文藍付碗



作品12 紫陽花蒔絵棗



作品11 花鳥蒔絵棗



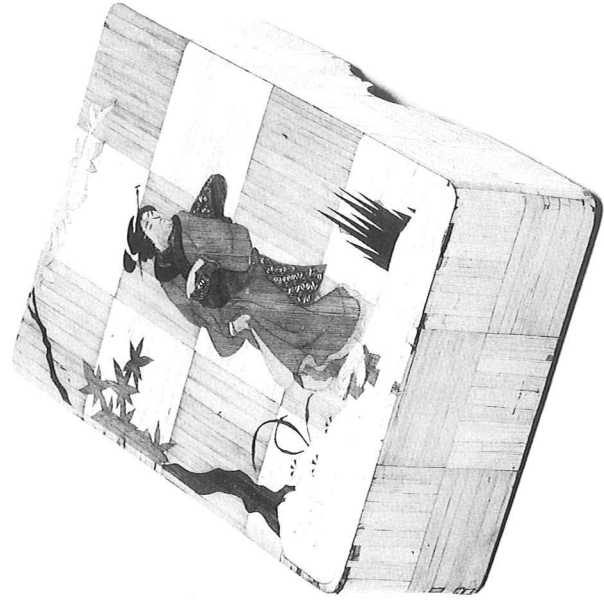
作品10 石山寺蒔絵香箱



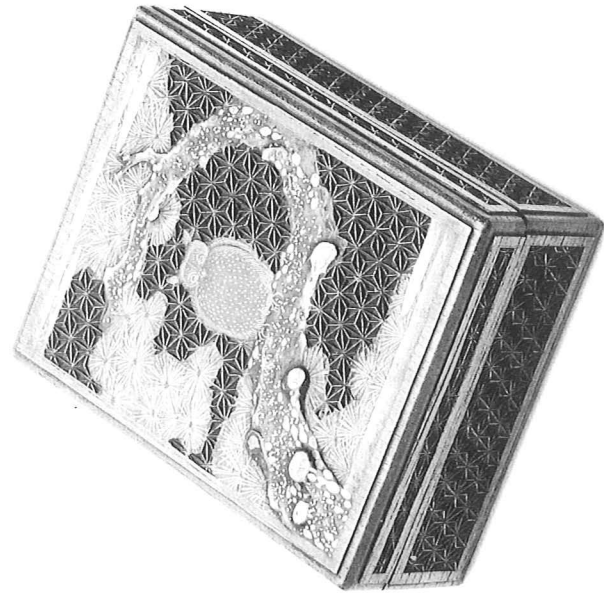
作品9 梨子地菊竹蒔絵葵紋付手箱



作品16 竹月寄木細工手箱



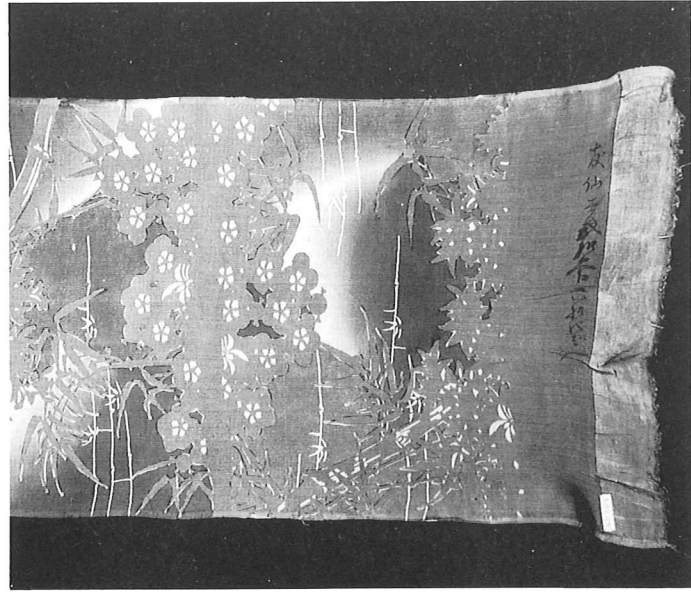
作品15 美人寄木細工手箱



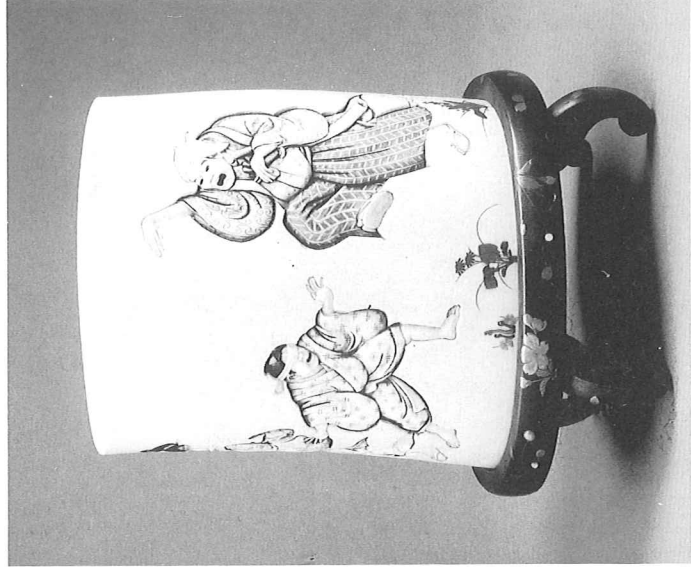
作品14 松木菟図手箱



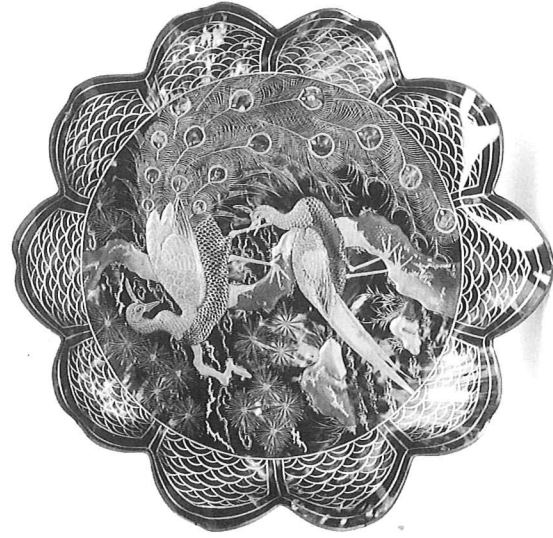
作品13 | 菱形手提げ重箱



作品20 梅竹文友仙染反物



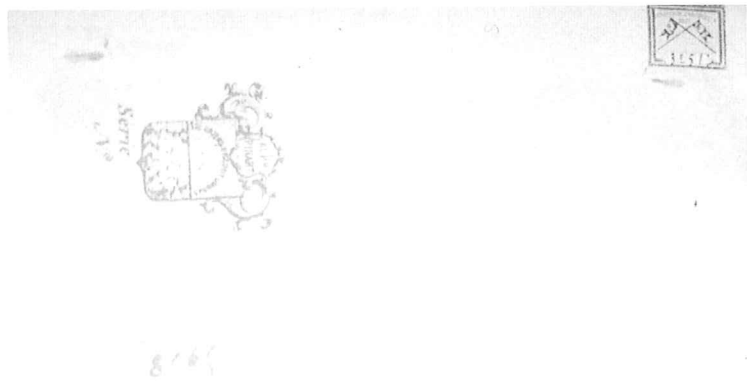
作品19 原舟樂象牙浮彫置物



作品18 孔雀蒔絵花卉形盆



作品17 松鷹蒔絵小箱



作品23 大日本國細圖 上下



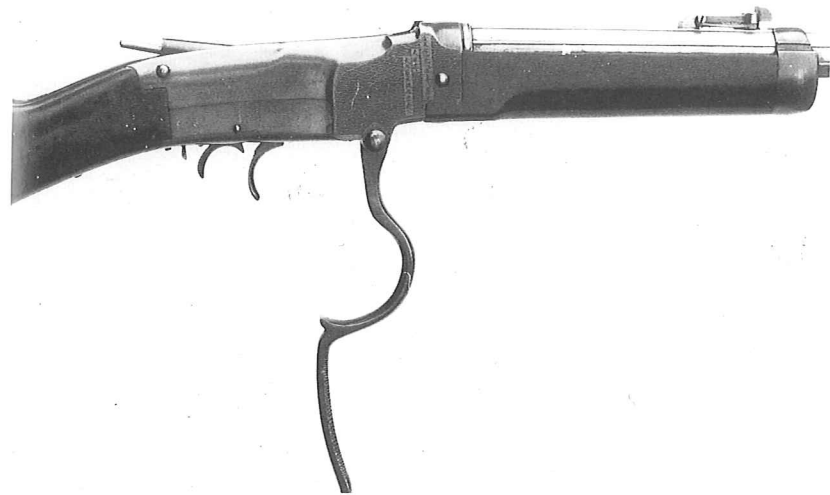
作品24 源氏物語小鏡 七 (部分)



作品22 七宝重箱



作品21 七宝水注



作品25 大工原箕一 銃



写真35 1878年パリ万博日本パヴィリオン中庭

一八六七年パリ万国博覧会における「日本」

——日本出品をめぐる——

森 仁史

本稿は日本が正式に初めて政府として参加した一八六七年パリ万国博覧会への日本の出品の実情をできる限り正確な視覚資料に基づいて再構成し、ヨーロッパにおけるジャポニスム興隆の端緒となったできごとの実態に迫り、そこから生じた諸問題の根源を探ろうとするものである。なお、本文中では原則として太陰暦の日付を採用し、必要に応じて西暦を()内に続けて示すこととする。また参照すべき図版番号を「」で示した。

はじめに

これまで、日本における万国博覧会への関心は大きく言って、科学文明史と美術史の二つ方面から注がれてき

た。前者には吉田光邦を中心とする万国博覧会研究会の研究¹⁾があり、後者はジャポニスムの端緒としての日本出品²⁾について、大島清次を実質的嚆矢として研究されてきた。後者の成果は一九八八〜八九年にパリと東京とで開催された「ジャポニスム」展により、文献と展示物の双方で提示された。これと同時に、フランスで日本の出品物の追跡についても重要な発見があり、この後の調査に重要な転機をもたらした。また、日本近代美術の草創期の研究の進展とともに、博覧会の位置についても関心が高まっている³⁾。さらに、最近万国博覧会の思想史意味の検討から新しい見解が示されている⁵⁾。

以上に触れたこれまでの研究では、万国博覧会への日本出品状況については新聞掲載その他の版面に依拠して

おり、その画像にはヨーロッパ作家の主観・興味・経験といった限界がつきまとうことは避けられず、ヨーロッパ人の印象記に基づいて日本出品のフランスへの影響を考察しようとするものであったことも指摘しておきたい。本稿では、出品の具体的状況について、これまでの研究では検討材料として充分利用されてこなかった写真を取りあげここから外国人作家によって充分にはくみあげられなかった情報を読み取り、これに他の資料を総合して、その実相を逐一解読し検証してゆくこととしたい。

また、具体的な検討の前に指摘しておかなければならないのは、万博の企画者は未知のものを紹介することに熱意を燃やし、このゆえに博覧会は新しい発見発明の展示の最初の場所であり、「見せ物と言ふより学校」であった。一九世期末の博覧会においては、かれらの動機の根源は日本も含めた未知のくにをヨーロッパ世界観へどう位置付けようとするかの意欲であったが、他方観衆の関心のありかたは未だ見ぬ新奇なもの（ましてや極東の島国「日本」であってみればなおさら）への好奇心が大部分であった。したがって、日本の出品もこうしたギャップのある両様の目で捉らえられていたことを常に念頭に

間、何卒急速御返書被下度此段奉待入候、拜具謹言

慶應元丑年六月廿四日

佛蘭西全權

ミニストル

これに対して、幕府は第二次征長中にもかかわらず迅速に七月二日付で老中、若年寄から「我国所産之物品可差出旨」を返答しているが、一月を経ずして將軍家茂が死去している。

七月一七日（九月六日）に横須賀製鉄所開設ほかの案件処理のためにパリに到着して滞在中の柴田剛中に対しても、フランス側から出品依頼が八月初旬に行なわれ、程なく返事をしたようである。柴田はロッシユの推薦でフリーリー・エール *Fleury Herald* を七月末に日本総領事に任じたが、一八日以來しばしば柴田を訪れたモンブラン *Mont Blanc* を「一つの煩累」として疎んじ、ついに八月三日には怒って帰らせてしまった。幕府に反感を抱いたモンブランは九月二四日パリに到着した新納刊部、五代友厚に接触し、「薩州別区」の策動をはかったと思われる。一〇月六日モンブランは「産産物を展観場（万博会場）引用者」へ御国産物へ東て出¹⁰してはどうかと述べ、柴田を激怒させた。この動きに対して、柴田らは

1 日本出品の準備

一九六七年パリ万博開催は文久三（一八六三）年六月の勅令で決定されたが、日本への出品の打診が最初になされたのは、慶応元（一八六五）年江戸においてフランス大使レオン・ロッシユ *Léon Roches* から¹¹、六月二四日付け書簡で再び要請が行なわれた。

以書簡致啓上候、然者西洋一千八百六十七年五月朔日於我パリスニ博覧會相催候一条ニ付、過日江戸表ニテ御對話之砌右之廉々申上置候處、猶又此程國帝之命トシテ我外国方之「ミニストル」ヨリ貴國政府江得与可被申達旨、重而命セラレタリ、就テハ日本、英吉利、魯西亜、亜米利加何レモ同様ニ各国之産物、武器、細工物、諸藝之器物等ニ至迄、其以前ニ我パリス迄被置差遣候様致度、此段奉願候、右者山口駿河守、栗本瀬兵衛

御兩人江委細申入置候間、右間合之上速ニ御左右有之度、左スレハ我來度之飛脚船を以本国江申遣置候

フランス側と「縷々談刊」し、十一月二六日、アジア担当の総務委員レセップス男爵 *Baron J. de Lesseps* は「琉国の名を仮り薩産の品を別区に為差出候所置は不為致」ことを柴田に約束させた。

これが、後の対立事件の火種となるのであるが、事前で作成された万博出品目録には琉球公国 *Principauté de Liou-kiou* 出品三件のみが記載されているのは、この間の経緯と幕府の準備の出遅れのためと推定される。

この間にも幕府の出品準備が進められ、一〇月三日（一月二〇日）、エールより柴田へ「当国展観場へ御国より御回し品、第六七年正月一日迄に御廻し可有之」との要請があり、柴田は出品必要経費として一〇万七〇〇フランをエールに託した。柴田のもとに帰国前の一月二八日には会場平面図が届けられた。

一方、日本では、慶応元年九月には武器、宮室、服飾、玩器、虫獣皮、雑貨などについて出品準備が申し合わされ、翌年二月には御勘定所、外国方、御目付方が分担して収集することを決めた。二月九日にはレセップスから日本に届いた詳細な出品依頼に基づいてその準備が指令されている。しかし、準備は遅々として進まず、五月頃

より、古物の収集は玉屋忠次郎・越後屋現七・近江屋伊兵衛・植木屋平作ら商人に依託することとし、これが六月八日時点で一万三八三一両余りに達した¹⁴。また、新規製作の依頼なども行なわれた。開成所物産学出役田中芳男が二月から昆虫植物標本などの博物資料の収集を始め、一月にはフランス派遣が命ぜられた¹⁵。

このほか、幕府は元年一二月に出品有志を町奉行を通じて募ったが、翌年二月一日清水卯三郎(一八二九〜一九一〇)は箕作秋坪の勧めで万博出品物収集を願い出た。清水は安政元(一八五四)年より断続的にこの秋坪について外国語を学び、万延元(一八六〇)年には英語会話書『もんざりしことば』を著していた。清水は幕府からの借入金一万五千両をもとに、およそ三万二千両の出品物を集めた¹⁶。

慶応二(六六)年一月二四日品川沖のアゾフ号に幕府・商人出品物が積み込まれ、外国奉行支配調役塩島淺吉、田中らが芸妓三人らとともに乗込んだ¹⁷。エラールからの報告によれば、翌年二月一日(三月二四日)にこの一行がパリに到着し、二三日(二八日)頃に日本出品物も到着した模様である。また、薩摩藩の出品物はモン

より質的に優れた作品を含んでいたことは言を要さないからである。

2 博覧会場

万博会場はシャン・ド・マルスがあてられ、この中央に間口三七〇¹⁸、奥行四八二¹⁹、面積一四、六〇〇平方メートルの楕円形をした巨大な産業宮Palais de l'Industrieが建設された。「写真2〜3、図1〜3」その中心部に地球儀を頂くドーム屋根とその下に時計を付けた造幣局パヴィリオンを中心にした中央庭園Jardin centralが造られ、「写真5」その周囲に内側から労働の歴史博物館 Musee de l'Histoire du travail、美術ギャラリー Galerie des Oeuvres d'Art、教養学科ギャラリー Galerie des Arts Liberaux、家具ギャラリー Galerie du Mobilier、衣類ギャラリー Galerie du Vêtement、原料ギャラリー Galerie des Matieres Premieres、機械ギャラリー Galerie du Travailが同心円状に配置され、各国の展示区画がこれらに直角に横断して割り当てられた。「写真6〜15」また、各国の展示区画にはほぼ対応してレストラン、喫茶店が産業宮の外周に設けられた。こうし

ブランの幹旋で直接万博会場に送られたらしい¹⁸。

日本出品内訳概数

区分	件数	内訳	箱
幕府出品	六八四	六六八一点	一八七
商人出品	二三一	二三四六点	一五七
佐賀藩出品		二八四五七点	五〇六
薩摩藩出品		一二八品目	五〇六
清水家蔵品	二七	三四組	
土産品	六一	三五六点	
買入れ品	四〇	九七点	
持越品		一五点	
旅館廻り	五	一五部	

・「記録」第二 三六三、三六九〜三七五、三七七〜二七八、四八五〜四八六、五〇四〜五一七ページにより作成。

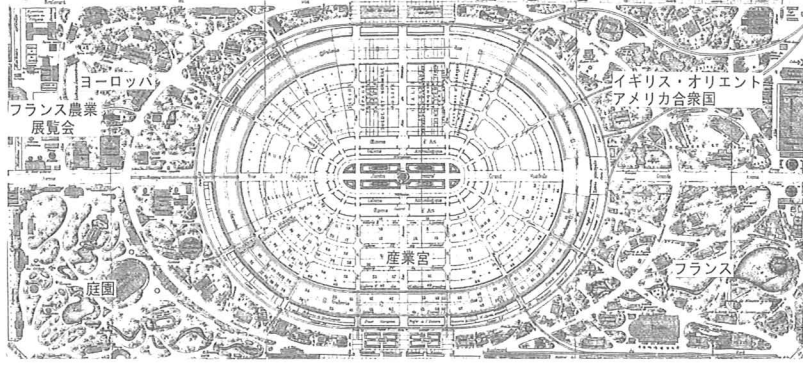
こうして、右記の通り武器、刊本、楽器、工芸品(漆器・陶器ほか)、紙などの出品物が日本から送られたわけであるが、万博への出品だけでなく各国巡歴の際の土産品として多くの工芸品が徳川昭武使節とともに海を渡ったことにも注目する必要がある。当然、後者のほうが

て、「横断面に進むと国別の展示品が見物でき、縦断面に進むと性質別の展示が見物できるような会場¹⁹」が実現したのであった。

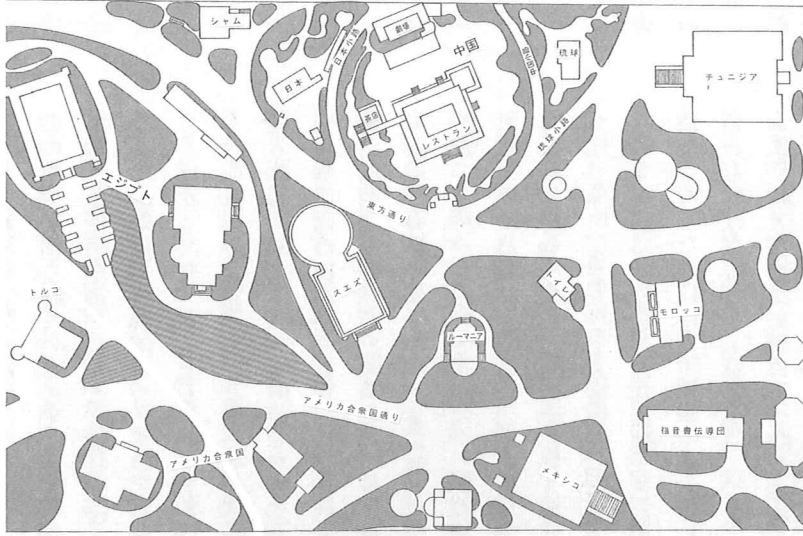
産業宮とシャン・ド・マルスの間に残された三角形をした四区画にアジア・アフリカのパヴィリオン、ヨーロッパ・パヴィリオンとフランス農業展示 Expositions Agricole Francaise、庭園Jardin、フランス・パヴィリオンがそれぞれ割り当てられた。これはあたかも地球上の世界を方形のシャン・ド・マルスに実物で描かれた曼荼羅とも言うべき様相を呈するものであった。「写真16〜19」

このなかでの日本の出品は計四カ所で行なわれた。一つは産業宮内の美術ギャラリー Galerie des Oeuvres d'Art に油画が、同心円状になったギャラリーに工芸品が出品された。さらに産業宮外の敷地内に日本と琉球のパヴィリオンが二棟建設された。「図4」これらはパリ到着後直ちに博覧会場を実地見聞した日本使節団によって確認されている²⁰。

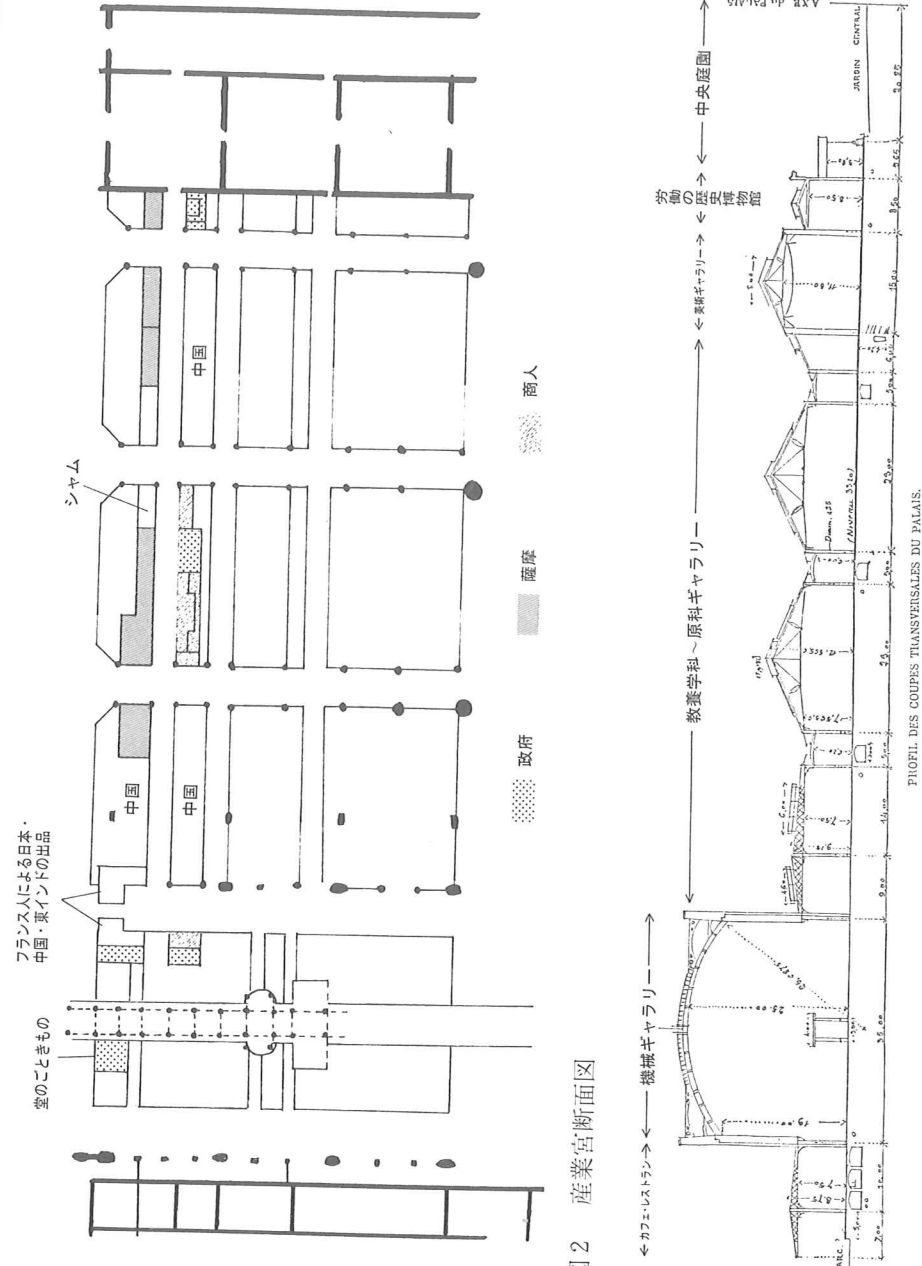
慶応二(一八六六)年一月一六日(二月二二日)にこれらのアジア・アフリカ部門総ての設計がスエズ運河会社設計技師アルフレッド・シャポン Alfred Chapon



挿図3 会場概念図



挿図4 アジアアフリカ・パヴィリオン



挿図2 産業宮断面図

挿図1 日本ギャラリー詳細図

に委嘱された。かれは日本以外のアジア・アフリカのパヴィリオンとギャラリーの装飾も設計したが、これらのパヴィリオンは年末から建設が開始され、翌年三月には完成した。アジア・アフリカ地区工事状況の版画〔図5〕には一部のパヴィリオンの工事状況と日本・中国パヴィリオン敷地造成状況が描かれており、完成後の配置と殆ど一致している。四月にはナポレオン三世夫妻やウージェニー皇妃は何度も工事現場に足を運んだ。このうち、もっとも大きな評判を呼んだのは四月一日(五月十七日)に盛大に竣工式を祝ったチュニジアのパヴィリオン〔写真21〕であった。このチュニジアのパヴィリオンはカルタゴ遺跡近くのアラビア建築「ブラド」Brado (チュニジア総督の宮殿)を模したものであった。

(1) 美術展示室 (油画出品)

慶応二年四月一七日、勘定・外国奉行より開成所へ「御国内景色宜敷場所模写」した油画出品が命ぜられたものの、同月一八日には取り止めとなっている。その背後には西洋風の出品を避けようとする幕府の意向も働いたと考えられる。しかし、九月二十九日には油絵額について

「御向にて御出来之油絵枠繪無之候ては見體も如何可有之哉と存候間御手輕之枠祿御出来御取付有之候様致し候」との指令が出されているので、この時までには当然額に入れるべき作品が描かれたとしなければならない。

これ以外にも幕府は、フランスからの博覧会規則をおもんばかってか、ことさら「日本」的な出品物を集めようと商人へも「歐羅巴より渡来之小道具を除き総而日本製の漆器其外細工物」の出品を求めてもいる。こうして一旦は洋画の出品をためらったが、結局、幕府出品の「博覧会出品元價帳」の「圖畫之部」によれば、宮本元道筆「紫式部石山寺籠居之内」一点と他に九点計一〇点の「油絵額」を購入したのであった。同じ絵画出品の浮世絵「画帳三帖は三月に発注され、多くの浮世絵師を動員した大掛かりなもので、各帖は五〇枚で構成され各々日本の女性、名所、年中行事を画帳としたものであった。これらのうち前者のみが九月に納入となっているので、これをうめるために浮世絵画帳の納入後に付け加えられたのかもしれない。

フランス側出品記録の第二版では絵画の部に「カイセイジョ、江戸大学」Caizeidjo, Universite a Yeddo

の油画出品が記録されているので、最終的には開成所の画家の手になる油絵が万博会場でヨーロッパ人の目に触れたのは間違いないところである。

明治二七年の「画伯高橋由一翁伝」と同三〇年代の正木直彦のメモを総合すると、万博出品の油画は次のように推定される。

日本出品の油画

氏名	〔慶応二年の役職〕	〔作品名〕
宮本元道	〔画学局絵図調出役〕	〔石山寺の図〕
若林鐘三郎	〔水魚の図〕	〔鶏の図〕
吉田修輔	〔画学並出役〕	〔日本の童子一世那翁の肖像を見て感嘆する図〕
高橋怡之介	〔画学世話心得〕	〔女子活花〕
伊藤陪之助	〔女子活花〕	〔女子活花〕
間宮彦太郎	〔女子活花〕	〔女子活花〕
遠藤辰三郎	〔女子活花〕	〔女子活花〕
服部新之助	〔女子活花〕	〔女子活花〕
山上兵衛	〔不明〕	〔不明〕
寺門三蔵	〔不明〕	〔乳呑母子〕

二つの資料に食い違いがあるため、間宮、遠藤、服部、山上の個々の作品は確定できず、「袴着」、「美人」、「長刀稽古」、「茶店(あるいは谷中店)」のいずれかに相当することになる。

図2によると、美術展示室は厳密に国別に分けられなかったようであるが、イタリアの展示室を撮影した写真には日本出品と思われる油画九点―白木の装飾のない同一デザインの簡素な額(前記指令とも符合する)に収められた六点と念入りな彫刻を施した額に入れた三点―を撮影したものが含まれている。「写真22」イタリアの美術展示室は産業宮内において日本展示区画とごく近い放射線上にあったので、他の工芸品とは別に油画がイタリア出品に混じって展示されたのではなからうか。イタリア王国出品の油画の部にはアジア的テーマとしてはセントウリオオヌ「エジプトの神殿」のほかここに見られるような内容の作品はない。また、中国出品には「絵と書跡」、「水彩細密画」のほかの出品はなかった。開会後の一月五日にフランス人商人へ日本出品物の売却を依頼した目録にも一〇点の油画の記載があり、これらが画

学局の作品に相当すると思われる。したがって、最後まで日本の出品あったことは確認されていた模様である。⁽³⁰⁾

写真に写っている最上段のもっとも大きい①(図6中の番号。以下同番号で示す。)が宮本元道(一八三二〜一八八七)作品であろう。宮本は文久元年一二月水野忠徳の小笠原島巡検に随行しているので外国奉行組頭田辺太一とも旧知の筈であるが、安政六年一〇月二十九日蕃書調所絵図調出役となっている。維新後しばらく絵筆を折ったが、『小学普通画学本』の製作や三平堂と名づけた印刷工場を起こしている。⁽³¹⁾

石山寺の紫式部の画題は源氏物語の構想を石山寺で練ったという伝承に基づき、「石山寺縁起絵巻」巻第四以来さかんに描かれ、幕末の英一蝶、酒井抱一の作品や、明治に入っても幸野椋嶺、森寛斎の作品が知られている。⁽³²⁾この写真では、寝殿造りの建物の勾欄をめぐらした広庇に立っている十二単の女性と童女、その背景に湖と月が認められる。この画題の伝統的な構図としては室内で執筆中の式部が観月する姿が通常であるが、ここでは式部を前記絵巻にならって立った姿で描き、湖上の月を望むという構図を採り、日本画の伝統からそれほど外れていな

い。万博日本出品の蒔絵「作品10」にも広庇で座机に向う式部が見られる。

この題材を油彩で描いたものとしては印藤真楯の「石山紫式部」(「作品1」)がある。印藤ははじめ川上冬崖に学び、のちに工部美術学校に入学した作家であるが、灯りを点した夜間の室内から月を眺めるという構図を採用している。この写真から詳細を論ずることはできないが、画学局員の作品は未だ光と影に対する感覚が未だ充分ではなかったようである。第一回国勸業博覧会(明治一〇年)出品の山本芳翠「勾当内侍月詠図」(御物)などに通ずる古典的主題への親近性、遠近法への過剰な意識を感じさせもする。芳翠は明治四、五年頃内田政雄の将来したヨーロッパの絵画を見て、「夜の畫で蠟燭のあかりで髪を流ってゐる図があった。其画が全く光のついてゐる様だと其真に迫ってゐるのに驚いて：斯ういふ様な畫をかく様にならう」との決意から出発してこの作品の制作に至ったことである。⁽³³⁾

この他には②が寺門の作品で、袴姿の息子と母親を描いた③が題名から推測して「袴着」であろう。⑥は吉田の作品と考えられる。また、その下の母親と望遠鏡を覗

くこどもを描いた④を「美人」と、⑤を「茶店」と比定することも可能ではなからうか。したがって、文献上で知り得る一〇点のうちほぼ画題と一致する四点と、蓋然性の高い二点が画像として写真上で確認できることになる。したがって、簡素な額に入った絵はすべて画学局出品であるか、その可能性がきわめて高いとすることができよう。

いずれも、白い平板な顔面の描写と遠近感の強調や平板な背景、こなれた和服の表現などが共通している。無稽な日本画の伝統からの脱却のこうした試みは島霞谷、浅間利恵子ら「作品2、3」の草創期の洋画家の苦闘する軌跡に至る端緒であつたろう。⁽³⁴⁾

右側の⑦、⑧は文献のどの作品にも該当しないのであるが、この二つの作品の額を見ると、⑧の額の彫刻は菊の花と葉をモチーフとし、⑦の額は樹間に鳥(孔雀か)を浮彫している。これらの作風は素木に彩色しない彫り物を得意とした立川流の寺院建築の欄間飾りや扉やその周囲の装飾の浮彫りそのままであり、モチーフも瑞鳥端花といったルーティンを踏襲しているようである。⁽³⁵⁾また、同じスタイルのもう少し小振りな額⑨が見えるが、これ

は写真20で見ると風景画のようである。ここから判断しても、これらが日本の作品と判断できようが、とくに花鳥を描いた⑦は直ちに河鍋曉斎「花鳥図」(東京国立博物館蔵)を想起させる作品である。この二点は明らかに南蘋派や長崎派(⑧の芭蕉はしばしば取り上げられる。)の日本画の伝統を借りて画面をとりあえず構成し、その描写構図をそのまま油彩の技法に載せ置き換えて、「日本の油画をつくろう」としてゐる。あるいは、当初の日本風景よりこれらの(いかにも通俗的な錦絵に登場しそうな)花鳥人物画がヨーロッパ人にはより「日本」を感じ取れる主題であつたがゆえに、この方向転換が意図的に行なわれたとも憶測できるかもしれない。つまり、万博出品ゆえ幕府の意向を受けてことさらに「日本」的な主題・画風を意識したが、一人由一はそれに抵抗したということなのであろう。

シェノーの「明暗法にもとづく西洋的技法を用いて制作された日本人の絵画の試作品」に対する「あわれむべき凡庸さ」との否定的評価はこれら画学局の作品を見ての判断であつた可能性が高いのである。

(2) 産業宮（日本アーケード）

日本政府の運んだ大量の工芸品の殆どは産業宮内のシャボンが設計したアーケード形式のギャラリーに展示された。日本の展示状況については三月一三日（四月一七日）に現場を見聞した向山一履の同二日付け上申書に付属した図面が最も詳細であるが、これとフランスで発行された会場図面とを総合したものが挿図2である。これによると、薩摩藩の展示スペースがかなり大きく、商人に割り当てられたスペースが小さいことが分る。この報告によれば、展示の準備状況は持込んだ工芸品の量に対してかなり手狭な状態で、展示面積拡大の交渉が行われたことが分る。⁽²⁸⁾

：レセップより淺吉等江さし出候圖面も有之候へ共疑敷廉々有之候間拙者よりもレセップ其外掛かり役人江引合實地に而請取候場所別紙繪圖面之通に而夫々割合候而は甚狭く御品十に五六は飾り餘り可申は必然に候へ共兎に角受取候場所丈け飾附不申候而は彼

昨今造作中⁽²⁹⁾とあるので、四月末頃には竣工したものと思われる。これとシャム出品の実物大の象の模型がしばしば版画などで日本の展示の題材になったが、写真も残されている。「図19、20、写真24、26」版画では最初の一点は写真と較べるとこの時代のヨーロッパ人がどんな意識で極東を見ていたかが窺え、シャボンの手になる作られた「日本」風がさらにもう一度ヨーロッパ人のフィルターにかけられ見るも無残に改変されている。これらがかれらにとってある共通の理解内容を差し示す「日本」を取りまくイメージであるとするならば、ここにはヨーロッパ人が未だ見ぬ辺境に寄せる視線の有り様が定着されてはいないだろうか。このように偏って増幅された視線があるときには見ているはずの日本人も既知の類似のイメージ（例えば、中国の）に引きずられつつ容易に変容してしまうか、逆に客観的な博物誌的な描写の覚醒へと向かうのである⁽³⁰⁾。

総てがヨーロッパ人の視点に引き寄せてアレンジされるのではなく、例えばオーブンの作品「図20」は写真24とほぼ同一の視覚から描かれたものであるが展示品を含めて客観的な描写で極めて精緻に描き込まれており、

方疑念いたし増地之談判纏兼候間差向御品之儀は不残外箱より取出し昨今飾附に取掛り居候間右相濟候上別に場所受取方談判いたし候積に有之候且商人共場所狭く候に付多分に餘り候事に候へ共増地之談判は前文同様之事に有之改正之圖面彼方より差出し候之積之處未た不差出間差出次第差進候様可致候

一八六六年二月の日付のあるシャボンの設計図面「図8、15」を見ると、ここでもやはりフランス人の理解していた「日本」が中国や東南アジアと明確に分別されていないものであったことは反りの大きな屋根や赤い格子、裝飾圖案を見ると相当に中国・東南アジア風であるのは否めない。一八六七年時点でのスエズ運河会社技師というかなりアジアについて専門的に知り得る立場のフランス人の認識内容がいかなるものかをかいま見せている。開会後に描かれた版画を「図16、17」見ると、シャボンの設計図面と極めて近似しているのが、恐らくはこれに近い状況で竣工したものである。このアーケードの機械ギャラリー部にやはりシャボンの手になる瓦屋根の日本家屋を模したバヴイリオンがつくられた。先に引いた向山報告に「此所堂のノ如キモノニテ已ニ素建出来

左側のガラスケースの中には写真で見られるごとく馬具が、バヴイリオンのなかには日本家屋の雛形が描かれている。写真ではここには多くの陶磁器が展示されているのが認められる。そこに冷徹で合理的な観察眼の成果、ないしは博物学の精神の発露を見ることができるといえる。

(3) 武者人形飾馬

これまでに、万博に武者人形が出品されたことは版画で紹介されているが、比較的注目を浴びたせいかわれを記録した写真も残されている。⁽³¹⁾「写真28、図21、22」

ウェーバーの版画はここに掲げた写真を下敷にしているのは明らかで、あまつさえ左右逆版で描いてしまっている。つまり、作者は日本の武者についてあまり詳しく知らず、実際の人形を見ないで逆版の写真に頼ってしまっただことを示し、当時の報道版画が写真に依った二次的画像であることを露呈している。また、もうひとつの版画は左右こそ間違えなかったが、従者の着衣は明らかにヨーロッパのものに変容してしまっている。しかし、描かれたヨーロッパの観客（右側は軍人らしいが）は異国の展示にすっかり見入っている。

これに相当するものは薩摩藩の出品目に見あたらないが、幕府出品の記録が残されている。慶応二年五月二〇日、フランス人商人シベリオン Chevillon と出品物についての詳細を取り決めが開成所で行なわれた。そのうちのひとつが甲冑人形の出品であり、その細目が次の様に決められた。

甲冑之儀は張子等之馬并人形を造り乗馬之姿に仕立
右甲冑を用ひ是に着せ一個は槍を携へ一個は大刀を
持たせ戦争之有様に致し御差出有之度事⁽⁴³⁾

写真で見ると、ほとんどこの打ち合せ通りのものが出品されたようだが、張子では馬具や甲冑の重量には到底耐えられないはずもなく、特別にしつらえた木彫に変更されている。会期に間に合わせるため急がされたにもかかわらず、七月には加太八兵衛より二匹が幕府に引き渡された。紅紫厚房に梨子地梅に鳥蒔絵鞍と紫厚房に梨子地松に鷹蒔絵鞍をおいたものであった。また、甲冑人形は明珍宗正作の小札勝色糸織と小札紺色糸織の二揃が納められた⁽⁴⁴⁾。ただし、これらは活人形ではなく、具足と着衣一式であったことが分る。写真が二体のうちのどちらかを特定することはむづかしいが、これらが幕府出品の甲

厳密に言えば、日本に割り当てられたのは中国パヴィリオンを挟んだ二つのパヴィリオンだったのである。後者の一方を斜め正面から写したのが写真32であり、板葺らしい入母屋屋根に竹の軒がつけられ、漆塗の棧のある障子戸と襖をたてた日本風の家屋が写され、柱には薩摩のエンブレムが掛けられている。(ここでは一応これを使宜上「琉球パヴィリオン」と呼び、もう一方を「日本パヴィリオンと呼ぶ。)妻に不自然さが残るものの、全体としてはバランスのとれた和風家屋となっている。

さらには、縁側に三台の卓とその奥には男性の生人形らしきものが見える。詳細な俯瞰図「図25」を見ると、写真30〜32に写されている中国パヴィリオンとして三つの建物が精緻に描き込まれており、これを以てすればこの版画の描写の信頼度はかなり高いとすべきであろうが、この中国パヴィリオンの奥に三段の寄棟屋根を持つもう少し大きいパヴィリオンが見出せる。琉球パヴィリオンは手前のチュニジア・パヴィリオンの右手から半分だけ見えている。

先に挙げた二種類の会場図面ではパヴィリオン配置が図三より図二でいっそう正確に表現されているが、琉球

冑人形であることは疑いを入れまいであろう。写真には薩摩のエンブレムが人形の前に置かれているが、これはモンブランによって準備されたものではなからうか。(これについては後述)

(4) パヴィリオン

アフリカのパヴィリオンとしてはエジプト「写真17」、スエズ「写真28」、モロッコ、チュニジアが、アジアのパヴィリオンとしてはシャム、中国、日本、トルコが建設され、このなかでは中国「写真29〜31」がもっとも大規模で、レストラン、劇場、茶売店からなる三棟で構成された⁽⁴⁵⁾。

これまでの研究で、六七年万博の日本出品としてもっとも話題をよんだ柳橋芸妓のパフォーマンスの舞台として「日本のパヴィリオン」が、その版画による画像をもとにしばしば引用、紹介されてきた。「図23〜25」この茶店は六月七日(七月五日)午後二時から開店し、この日約四〇〇人、翌日の土曜日は一三〇〇人余りが訪れる盛況であった⁽⁴⁶⁾。また、中国パヴィリオンでは一八歳と一六歳の女性が酒や写真を販売した⁽⁴⁷⁾。

小路Allée de Lou-Kiou は同一なのに前者ではまとめて日本と表記されている部分が後者では日本の家Maisonと薩摩公国Principauté de Satsoumaと表現され、目録第一版によれば薩摩藩出品はすべて「琉球公国」と表現されていた。したがって、当初はこの名称で準備されていたが、三月一七日(四月二一日)のレセツプス邸における万博事務局と幕府、モンブランとの会談で再び表面化した幕府と薩摩藩の対立がこのエンブレムに反映されているのではないか。会談直後の同月二〇日(二四日)付けのラパルトなる人物からの外国奉行宛の手紙が『公私雑報』第一二号に掲載されている。かれが薩摩の展示で目撃した「日本薩摩の政府」とフランス語で書かれたものがこれであろう。つまり、これ以前は薩摩藩を含めて「日本」としてフランス側が理解し、「公国」としてきたものをモンブランが「政府」と記して、エンブレムをわざわざつくったのではなからうか。他の会場写真にはこうした国名の特別な表示板は全く見られないのが不思議である。

日本パヴィリオンは写真31で、中国パヴィリオンの左手の扉の向こうにその屋根が僅かに写しとられている建

物に相当する。板塀の上部に紅白の幕らしきものが掛けられているのが見える。棟と軒隅に頂華状の裝飾が付けられている。写真32の左手の灯台と中国パヴィリオン劇場の位置からすると、入母屋の琉球パヴィリオンは中国パヴィリオンに向かって右手になければならず、寄棟の建物と入母屋の建物は別の位置あつたはずである。写真17によると、エジプト・パヴィリオンの彼方に屋根に垂木が渡してある建設中の建物が見えるが、この位置と三段の屋根の形状からすると、これが琉球パヴィリオンとは別の日本パヴィリオンである。

これは先の向山全権代表の報告に付属する見取図(図4)とも一致する。

フランス側のもっとも信頼できる記述は『絵入万博新聞』のポール・ベレの⁽⁴⁸⁾記事であらう。

チュニジアの建物から少しの所で、生け垣に囲まれた風変わりな住居にいきあたる。そこには「日本の農家」とあり驚かないわけにはいかない。

そこに入ると、フランスから三千里ユー離れた日本⁽⁴⁹⁾のど真ん中である。

縁が尖がった藁屋根で、てっぺんに住居の守り神

きではないので、ベレの記述や図22と矛盾するが、昭武一行と同時に着いた三月から開店の六月までの間に清水の配下⁽⁴⁹⁾たちによって藁葺きにされたのかもしれない。茶屋の造作に対して銅メダルが与えられていること(後述)は注意すべきであらう。ベレの記述によれば、幕末に浅草奥山で盛んに興行した活人形がパヴィリオンに展示されていたのである。この出品者は卯三郎と考えてよく、場合によっては写真32の人形もあるいは卯三郎が運んだものかもしれない。前述のごとく、ここに薩摩のエンブレムがあるからといって、実際に薩摩藩の展示が行なわれていたと即断はできないからである。

また、七月四日(八月三日)の『航西日記』には、日本パヴィリオンについて、「此の家にて最見ものとするは庭の端に一廡を設け其國俗種々の人形を列せるなり右は日本の貴賤なるものより貴富の者まで各種の俗を示せるものなりその人形を見又は家の後ろに羅ねたる日用雜貨の賣物とを見は一時間にして些の苦勞もなく遠く日本に旅するものといふとも可なり⁽⁵⁰⁾」という新聞記事が紹介されている。

以上の検討を経てみると、版画の「日本のキオスク」(図

ととてもきれいな怪物の神々しさを表した家だ。女性のすまいがあり、そこに三人の日本の美女、江戸の本物の三人の娘、おさと、おすみ、おかねがいる。若い女性はお喋りをしたり、羽根つきで遊んだり、阿片のたばこをすったりして時を過ごしている。この近くに、二軒目の日本の農家がある。一人の日本人がその地方の慣習であるティー・サロンの準備をしている。日本の茶碗でそれを売るのが、郷土的な色合いと趣味である。

農家のそばの農夫が作業道具を片付けるような小さな小屋に日本の勤労階級にありふれた服装をしたいくつかの人形が集められている。それらの人形は全く精巧である。それは簡単に確かめられる。つまり、二人、三人の生身の日本人が農家に普段いるので、人々は一見しては人間と陶製人形を完全に見分けることはできないからである。

日本パヴィリオンが一軒の農家と付属した小屋とで構成されていたことが分り、一軒の全くの独立家屋であった琉球パヴィリオンとは別なパヴィリオンがあったことが確かめられる。琉球パヴィリオンは写真で見ると藁葺

3」は琉球パヴィリオンを指すものであり、図25は「サツマ公の家の内部」(八月三日付掲載)と説明がついているので、これまでよく紹介されてきた三人の芸者のパフォーマンスと清水の出品は前述のアーケードが極めて手狭であったことでもあり、琉球パヴィリオンで行なわれたと考えてよさそうである。

これらを総合すると、メリメが九月に会場(恐らく琉球パヴィリオン)で「日本の友達を見」、「あなた(文通相手のジャン・ダカン・筆者註)が、Yeddoでこんな風に見世物にされ、Satzouma公の街の俗物が、「あの女の着物の後にある瘤は、確にほんものの瘤かどうか知りた⁽⁵¹⁾いもんだ」などと言っているところを考えて「ごらんなきい。」と女性の出身地の江戸とパヴィリオンの薩摩の地名を両方とも引用して、述べているのも頷ける。

ましてや家老岩下方平らは一〇月三日(十一月三日)の閉幕を待たず、白耳義商社設立交渉のためブリュッセルへ旅立ち、七月二十九日(八月二八日)には帰国してしまっている⁽⁵²⁾ので、この琉球パヴィリオンの実質的な運営が五代友厚、松木弘安とも旧知の間柄である卯三郎の手にあったと見ることが可能な⁽⁵³⁾のではあるまいか。

3 日本出品物とその行方

会期半ばの五月二十九日(七月一日)に褒賞授与式が行なわれ、グランプリ六四、金メダル八八三、銀メダル三六五三、銅メダル六五六五、名誉章五八〇一が審査の結果授与された。⁽⁵⁴⁾このうち日本出品には、紙・漆器・手細工物・養蚕に対してグランプリが、木製家具・家具コレクションと繊維製品コレクションに名誉章計二個が授与された。徳川昭武はその受賞式にもトクガワ殿下として招待され、向山一履、山高信離とともに出席し、直径七八センチのグランプリ・メダル「図26」を授与された。⁽⁵⁵⁾メダルの表にはこの万博で彫刻部門で一等賞を得たボンスカルメ Ponscarne 作のナポレオン三世像が浮彫りにされ、裏面に天使、月桂樹、鷲の浮彫りと受賞者名「日本」が刻まれていた。「図27」会場中央を撮った写真「写真33、34」では、左側二列目に各国の元首とならんで着席して身じろぎもしない昭武が写しとられ、黒染抜紋付羽織に錦の袴を着用しているのがわかる。

このほか、実務担当者にも次のようにメダルが授与されることが発表された。こちらは表のボンスカルメの浮

彫は同じだが、裏面に浮彫りはなく「バリ万博・褒賞」とのみ陽刻され、受賞者の名前が入っている。⁽⁵⁶⁾

事由	氏名 (メダルの種類)
産物種類分類	生島孫太郎 (銀)、田中芳男 (銀)
補助人	塩島浅吉 (銅)、中山七太郎 (銅)
博覧会総掛	北村之四郎 (銅)、多ひすや (銅)
博物学	日比野清作 (金)
針打鉄砲	田中芳男 (以下は銅) [以下は十月渡]
刀剣	大工原箕一
鎧など	御腰物方
馬具類	明珍
漆器	牧田
瀬戸物	玉屋忠四郎
銅器類、紙類	伊東七郎兵衛
グランプリ	近江屋伊兵衛
対象品提出者	日下部友之丞、阿久澤桂次郎、吉田揚之助
絹類	藤右衛門
乗物	かきや太衛門
茶屋	大工藤五四郎
象牙漆器	武蔵や幸兵衛

出品物は殆どがバリーで売り払われたものの、昭武ら帰国後の明治元年一月一〇日(一八六八年二月二三日)に戊辰戦争のさなかの騒然たる横浜に到着した御用荷物の中には、連発銃などとともにいくらかの万博出品物が含まれていたようである。渋沢の日記には、一三(二六)日「杉浦愛蔵米、博覧会残品同人立合取調、浅草森田丁瑞穂や卯三郎方差立る、但し荷数十箇、此車代金四両式分相払⁽⁵⁷⁾」とある。

僅かに持ち帰られた以外の膨大な日本の出品物が誰の手に落ち、どんな受けとめ方をされたのか、われわれにはもっとも知りたいところであるが、正確なデータは乏しく、今日残されている断片的な資料でこれを推測するほかはない。

(1) 売却目録

会期終了後の慶応三(一八六七)年一月五日(三〇日)、メナール通り三番地のフランス人商人シヴェリオン Chevillions との間に日本出品物の売却依頼契約が結ば

れ、これに付属する目録が作成されそこに千一四件が挙げられている。(註三〇参照)会期中には日本製品の売れ行きははかばかしくなく、佐賀藩出品も「最前展観中、漸百箱程賣、残り四百箱餘ニ有之、尤花瓶其外者随分宜敷直段ニ賣揚候得共、皿、茶碗類大厄介物、何レ共運六ヶ敷大苦配、難尽筆紙候⁽⁵⁸⁾」というありさまで、多くが売れ残ったはずだが、幕府出品の『北齋漫画』一四冊、『北齋畫譜』三冊は売ってしまったのか見当たらない。⁽⁵⁹⁾

佐賀藩は一二月に三〇箱ほど競り売りし、ロンドンへ行く深川長右衛門へ四〇箱、オランダへ行く佐野常民に三〇箱を託した。この頃から陶器が少し売れ出したよう⁽⁶⁰⁾で、二月初めにラファイエット通りのデュシマン商会と陶器の売却契約を締結した。ただし、これには目録は付属していない。清水もシヴェリオンとの間に一二月一六日(一月一〇日)販売依頼契約を結んでいるが、これにも目録は付いていない。⁽⁶¹⁾

しかし、一八七四年ウィーン万国博覧会により日本製品の評価が高まり、「忽ち購買シ去ラレタ」とのことである。⁽⁶¹⁾

(2) 一八六八年売立目録⁽⁶²⁾

万博の翌年、日本出品物一三〇八件の売立がバリで行なわれた。この目録には夥しい数の象牙細工(根付けを含む)、櫛、印籠の類の小型の工芸品が登載されている。これらは恐らく卯三郎の出品と思われるが、江戸庶民の美的感覚を知る上には格好の対象であったはずだが、今日知り得るのは全く僅かである。

(3) ヴィクトリア・アルバート美術館

一八六八年にサウス・ケンジントン博物館は一五〇点以上の日本の出品物を購入し、翌年これを展示公開している。現在、ヴィクトリア・アルバート美術館に所蔵されているのは、このうちの七五件(八二点)である。⁽⁶³⁾

ここで個々の作品にたちいて考察する余裕はないが、いずれも幕末にいたって先行する諸流派の技能の総合、到達の水準を示す佳品が多い。また、集められたのが日用品の類が多いのはサウス・ケンジントン博物館の設立目的の故であろう。「作品4〜27」

(6) 大英博物館

現在アンダーソン・コレクションに「源氏物語小鏡

巻七」が含まれている。抱き若荷の陰刻された軸部に前記シールと近似したシールが貼られているが、交差した旗の下に三葉葵が入っている点が異なり、番号が入るべき部分は摩耗して判読できない。「作品25」

(7) ロイヤル・ガン・コレクション

現在イギリスのノーフォーク州サンドリンガムにあるこのコレクションに二組の一对の日本製の銃が所蔵されており、そのうち一对の二丁は図録に図版が公刊されている。⁽⁶⁴⁾同書によると、一九世紀には王室への贈り物の記録がなく、この来歴は明らかではない。また、製造年代は形式から一八七〇年代半ばから以降とされている。

日本出品には幕府出品の三丁の旧来の(恐らく火繩)銃と商人出品の火繩銃のほか、幕府が発注した新造の元込め銃が二丁含まれていた。慶応二年六月、陸軍奉行松平縫殿頭配下の大工原篁一は「元込焼色筋置上八角筒」を剣、小道具、球菓とともに、「元込磨筋置上八角筒」を

(4) ロニー・コレクション

福沢諭吉をはじめ数々の渡欧日本人との交流で知られるレオン・ロニー Léon Rosny のコレクションがフランス北部のリール市立図書館に現在所蔵されている。エスマンの調査によれば、このなかに万博出品物であることを示すシールが貼られた『大日本國開闢由来記』(シール番号三二五九)、『草木育種後編』(同三二六九)の二点が含まれている。⁽⁶⁴⁾

(5) ギメ美術館

この図書館に前記のシール(番号三二五二)の貼られた元治元年二月刻の『大日本國細圖』上下「作品24」が所蔵されており、これは幕府出品の図書の部には含まれていないので、商人出品として出品されたものであるう。

なお、このほかにシールのあるものはフランス人類学博物館所蔵(一八七二年ルーブルの民族学博物館に日本大使館第一書記より寄贈)の商家模型(番号二七六六)がある。⁽⁶⁵⁾写真24に写っていたものと同じである。

小道具、球菓とともに幕府に納めた。長さはそれぞれ二尺と二尺三分(六〇・六、六九・六九セシ)であった。⁽⁶⁶⁾これは上記のシヴェリオンへの売却目録にも見え、前記の六八年の目録にはこれに該当する一丁の銃として、「撃銃式銃と付属品。その仕上げが風変わりで、シヤスポー銃に似たひじょうに美しい武器」が記載されている。このほかに二丁の「銅で裝飾された日本の防御銃」も掲載されている。⁽⁶⁶⁾

サンドリンガムの一对の銃「作品26」は銃身二四インチ(六〇・九六セシ)、重量六ポンド(二七一八グラム)で、銃身に陰刻で「大日本」大工原土佐介宗武作、象眼で「獅子田秀親」と刻まれている。前者が鉄砲職人、後者が象眼職人であろう。一方の銃には「慶応元乙丑年八月日」大日本「大工原土佐介宗武作」と記されている。

細部の記述や記録がないので、何も確定的なことは言えないが、日本出品の大工原篁一の銃を推し量る手がかりではなからうか。⁽⁶⁶⁾

むすびにかえて

明治政府の輸出産業振興策の展開のなかで、外国人か

ら学び取った「日本」的要素を輸出工芸品に強調してきたことは「新古日本風」の工芸図案の研究・横溢などで具体的に指摘されてきている。⁽¹⁰⁾ 海外の博覧会への初出品というおよそ経験のない試行のなかでも、日本人の外国人からのまなざしの意識はすでにこの慶応三年の万博の時点で明瞭であった。例えば、幕府はシヴェリヨンの要請に応えて、向島花見の人物を描いた押し絵を「目立候品」として縦六尺横九尺の松木地黒塗、唐草彫りの金メッキの銅金具付の額といういかにもキッチュな「日本」風道具立てにし、五三両余りの代金で購入して出品したのであるが、これについてわざわざ「右額之儀は外国人共愛玩いたし候品柄に付新規御出来外御品同様仏国博覧会へ御差遣相成候、可然」と注釈している。出品物に明らかに外国人が日本風と感ずる要素を先取りしようとする意図が明らかである。

また、一八六七年と一八七八年万博の日本バヴイリオン「写真35」を比較すると、前者がフランス人からみた日本風家屋であり後者が日本から職人を引き連れて建てた本格的な日本家屋であるはずなのに、両者が驚くほど類似した農家であるのはどうしたことであろうか。ここに

も日本人のヨーロッパ人のまなざしを意識しながら再演する姿勢がほの見えないだろうか。ヨーロッパ人が感じ取った「日本」を更に本家の日本人が真似るといふねじれた関係とその熱気がここに見出せる。これはやがてアールヌーボーに日本人作家が出会う時にも再現されるであろう。⁽¹¹⁾

註

- (1) 吉田光邦『改訂版 万国博覧会』 NHKブックス 一九六〇。吉田光邦『図説万国博覧会史』 思文閣出版 一九八五。吉田光邦編『万国博覧会の研究』 思文閣 一九八六。
- (2) 大島清次『ジャポニスム』 美術公論社 一九八〇(講談社学術文庫 一九九二)。ジャポニスム研究の展開については稲賀繁美による綿密な文庫版解説を参照。
- (3) 『Le Japonisme』, Paris, 1988. (国立西洋美術館学芸課編 『ジャポニスム展』 国立西洋美術館 一九八八)。この展覧会で日本出品物はヴィクトリア・アルバート美術館所蔵の四点のほか、モロー美術館、人類学博物館所蔵品各一点が紹介された。
- Esmelin, S. Une bibliothèque japonaise au milieu du XIXe siècle: celle de Léon Rosny, *Nouvelle de l'Estampe*, mars 1986. ; Shimizu, C. Le Japonisme. A propos de

l'exposition du Grand Palais 19 mai-15 août 1988, *La revue du Louvre et des Musées de France*, 1988, No.2. 1) 両者によって日本出品へのシールが確定され、その検証が行なわれた。

- (4) 北澤憲昭『眼の神殿』美術出版社 一九八九。美術部第二研究室編『研究資料内国勲業博覧会・万国博覧会関原文献在目録』、同(二)、『美術研究』348・353 平成二、三。
- (5) 鹿島茂『絶景、パリ万国博覧会 サン・ジモン鉄の夢』河出書房新社 一九九二。吉見俊哉『博覧会の政治学 まなざしの近代』中公新書 一九九二。
- (6) Greenhalgh, P. Education, Entertainment and Politics : Lessons from the Great International Exhibitions, Vergo, P. ed. "The New Museology" L., 1989, p. 75.
- (7) 鹿島茂 前掲書、一七〇ページ以下。
- (8) 「仏国公使より差出候書簡和文」、『仏国博覧会二件』(東大史料編纂所蔵)
- (9) 「仏国公使江可被遣御返簡和文案」、『同右』。「徳川昭武滞欧記録」(以下「記録」と略記) 第二 『日本史籍協会叢書』 日本史籍協会 昭和七 二二六ページ
- (10) 柴田剛中「仏英行(柴田剛中記載)」(以下「仏英行」と略記)、『日本思想大系』66 岩波書店 一九七四 二九九、三二七ページ。福地源一郎「懷往事談」、『明治文学全集』第一一卷 筑

摩書房 昭和四一 三〇八ページ。柴田はシーボルトにも閉口した。

- (11) 「忠義公史料」、鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料』鹿児島県 昭和五二 四八〇〜四八二ページ。大久保利謙「五代友厚の欧行と、彼の滞欧手記『廻国日記』について」、『史苑』二二巻二号 昭和三七 九七ページ。
- (12) Exposition Universelle de 1967 a Paris. Catalogue General publie par la Commission Imperiale. Premiere Partie, Paris, wd.
- (13) 「仏英行」三七三〜三七四、四三〇、四三九ページ。「記録」第二 六九ページ。なお、この報告ではイギリスは二、九〇〇六、二五〇フラン、オーストリアは九〇〇、〇〇〇フランの出費であったと伝えている。
- (14) 「記録」第二 二〇七、二一五〜二二五ページ、二三五〜二六九ページ。
- (15) 前掲『仏国博覧会二件』、『日本教育史資料』第七 文部大臣官房報告課 明治二五 六六七、六七二ページ。大日本山林会編『田中芳男君七六展覧会記念誌』 同会 大正二 一六〜一七ページ。
- 田中の標本はポール・ド・ロールザに買いとられた。『殿様生物学の系譜』朝日新聞社 一九九一 一七二ページ。
- (16) 「記録」第二 三三三〜三三三、三三七〜三三〇ページ 第

朗編『スラブ世界とその周辺』 ナウカ 一九九二 四四四〜四四五ページ参照。

(42) 図17は *L'exposition Universelle de 1867 illustrée* 8

juillet, 1867. に掲載された後、リンメルの回想にも掲載された。

Rimmel, E. Souvenirs de l'exposition Universelle, Paris, L., 1868, p.319.

(43) 「記録」第二 二二八〜二二九ページ。

(44) 「記録」第三 一四五〜一四七ページ。同第二 一四八〜一五四ページ。

(45) レストラン棟の鴉尾や、屋根の反り、白壁などに東洋建築への研究が窺えるが、墓股が樹枝となったり、軒先にストライプがつけられたりしている。これらにはフランス人建築家における東アジア理解の内実を読み取ることができよう。

(46) 「赤松大三郎和蘭滞在懷中日記」、大久保利謙編『続幕末和蘭留学関係史料集成』 有松堂出版 昭和五九 一一七ページ。

(47) 渋沢栄一前掲「航西日記」 九三〜九四ページ。

(48) Bellet, P. Les Costumes populaires du Japon, *L'Exposition Universelle de 1867 Illustrée*, juillet 22, 1867.

(49) 「わがよのき上」、長井五郎『焰の人・しみづうやぶらうの生涯』 さぎたま出版会 昭和五九。これによれば一行のうち善八は建築の心得があったようである。一八二ページ。

また、薩摩藩一行のなかにも大工が含まれていた。鹿児島維新史料編『鹿児島県史料 忠義公史料』第四卷 鹿児島県 昭和五二 三一五ページ。

(50) 「記録」第一 一五三ページ。渋沢栄一前掲「航西日記」

一三七〜一三八ページ。この日記のみが芸者を活人形と同一のバヴィリオンで目撃しており、筆者の推定と異なっているが、より証言の多い方を採用した。

(51) 前川堅市ほか訳『プロスベル・メリメ全集』 第六卷 河出書房 昭和一四。二六九〜二七〇ページ。また、メリメは六二年ロンドン万博でも竹内使節団を目撃したらしいが、「腰に帯びた長刀で、あらゆる女連をひっかけてみました」などと書いている。同書 二三四ページ。

(52) 『鹿児島県史』 第三卷 鹿児島県 昭和二六、二二八〜二二九ページ。六月一日付け田辺太一より同僚への書翰「記録」第一による。

(53) 長井五郎 前掲書一四六〜一六二ページ。五代龍作編『五代友厚伝』 有斐閣 昭和五六。二六〜三三ページ。「寺島宗則自叙伝」、『伝記』三卷四号(昭和一年四月) 一一三〜一二四ページ。ただし、五代の伝記は清水「卯之助」としている。福沢諭吉『福翁自伝』角川文庫 昭和二八 一四〇〜一四四ページ。

かれは薩英戦争の際にはイギリス大使館通訳アレクサンドル・シーホルトとともに通訳を勤め、シーホルトとも旧知の間柄であった。

(54) *L'Exposition Universelle de 1867 Illustrée*, juillet, 15 et 22, 1867.

(55) 「記録」第三 二五六〜二五七ページ。

(56) 「記録」第三 二六一〜二六四ページ。大日本山林会編 前掲書 口絵。

(57) 渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記史料』 別巻第一 日記(1) 渋沢青淵記念財団竜門社 昭和四一 二八〜二九ページ。

(58) 村山和彦編『佐賀藩幕末関係文書調査報告書』 佐賀県立図書館 昭和五六。二三〇ページ。

(59) 「記録」第二 二五六ページ。

(60) 村山前掲書 二三〇〜二三二ページ。「記録」第三 六六〜七二ページ。

(61) 前記 田中芳男編書 二丁。

(62) Catalogue de produits et objets d'art japonais composant la collection envoyée du Japon pour l'exposition universelle de 1867 et groupée aujourd'hui rue de la Victoire, No. 41, Paris, 1868. (Après d'ici "Catalogue 1868")

(63) Science and Art Department of the Committee of Council on Education, List on Objects in the Art Division, South Kensington Museum acquired during

the year 1868, L., 1868, p.63.

during 1869, pp. 61-68.

(64) Esmein, S. op. cit. p.12.

(65) 前掲『ジャポニスム展図録』 八九ページ。

(66) Baker, D. J. The Royal Gunroom at Sandringham, Oxford, 1989 pp.99-101

(67) 「記録」第三 一三八〜一四四ページ。

(68) Catalogue 1868, p.6, 19

(69) 堀尾茂「英王室の銃コレクションの中に収蔵されている…慶応元乙丑年八月大日本大工原土佐介宗武作のカービン銃2挺の由来を問う」、『狩猟界』一九八六年六月。同「英王室の銃コレクションの中に収蔵されている…慶応元年作カービン銃2挺…その後の調査ルポ」、『狩猟界』一九九一年二月

堀尾氏提供のブ羅斯ロイド氏撮影の写真による。なお、一九九〇年に「このコレクションに研究目的の調査を申請したが、許可されない」との返答であったので、ここでは写真と図版をもとに検討した。

(70) 樋田豊次郎「起立商工会社の工芸図案」、樋田豊次郎編『起立商工会社工芸下図集 明治の輸出工芸図案』 京都書院 昭和六二 三六三〜六五、三七六〜七八ページ。

(71) 「記録」第二 四三九〜四四〇ページ。

しかし、会期中には売れず、シヴェリオンに引き渡されている。

図版目録

I. 写 真

番号	作者	作品名	所蔵	備考
1		シテ島パノラマ Panorama de l'île de la Cité	フランス写真協会	
2	ブラウン Braun	会場パノラマ (トラヴィエ門から 記念温室、産業宮)	フランス写真協会	
3		会場俯瞰(大学門から産業宮正面)	ロジェ・ヴィオレ	
4		産業宮内部	パリ市歴史図書館	Exposition Univer- selle 1867.
5		産業宮中央庭園	パリ市歴史図書館	
6		家具ギャラリー (フランス)	パリ市歴史図書館	Exposition Univer- selle 1867.
7	ビッソン Bisson	機械ギャラリー (イタリア、日本)	フランス国立文書館	Oeuvre des Frères Bisson, t.1.
8		産業宮展示 (イタリア工芸品)	パリ市歴史図書館	
9		機械ギャラリー (ロシア、イタリ ア、日本)	パリ市歴史図書館	
10		産業宮展示 (ポルトガル・ギャラ リー)	フランス国立文書館	
11	ビッソン Bisson	機械ギャラリー (オーストリア)	フランス国立文書館	Oeuvre des Frères Bisson, t.1.
12	ビッソン Bisson	機械ギャラリー (スイス、オース トリア)	フランス国立文書館	
13		機械ギャラリー (エジプト)	ロジェ・ヴィオレ	
14	ビッソン Bisson	機械ギャラリー (プロシャ)	フランス国立文書館	Oeuvre des Frères Bisso, t. 1.
15	デュヴァルフェ Duvalfe	皇帝バヴィリオン Porte d'Honneur	フランス国立文書館	
16		エジプト・バヴィリオン	ロジェ・ヴィオレ	
17		機械ギャラリー (スイス)	ロジェ・ヴィオレ	

「記録」第三 四一ページ。
 (72) これは白人がまねた黒人芸をさらに黒人が真似るといふ初期
 のジャズの構造を思い起させる。リロイ・ジョーンズ(上林澄雄
 訳)『ブルースの魂』音楽の友社 昭和四〇 一〇五〜一〇七、
 一六二〜一六三ページ。

ISSN0915-7433

戸 定 論 叢

第 3 号

図版 1867年パリ万国博覧会関係画像史料

I 写真 II 図版 III 作品

一八六七年パリ万国博覧会における「日本」

—日本出品をめぐって— 森 仁史

慶応三年遣欧使節団参加者の記録について

—徳川昭武日記を中心に— 柏木 一朗

松戸市戸定歴史館

戸
定
論
叢

第
三
号

松
戸
市
戸
定
歴
史
館

ISSN0915-7433

TOJO-RONSO

CONTENTS

Volume 3, 1993

Plates

Images of Universal Exhibition in Paris in 1867.

I. Photographies II. Prints, drawings

III. Work of art

Article

《Japan》in the Universal Exhibition in Paris in 1867.

— On Japanese Exhibits — MORI Hitoshi

On the records left by participants of the European
delagation of 3rd year of Keio (1867). KASHIWAGI Ichiro

TOJO HISTORICAL MUSEUM

714-1 Matsudo, Matsudo, Chiba-Ken 271 Japan